京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-3

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二〇-三

平安京左京四条四坊十二・十三町跡、富小路跡

平安京左京四条四坊十二・十三町跡、富小路跡

2020年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京四条四坊十二・十三町跡、
富小路跡

2020年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、オフィスビル建替えに伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

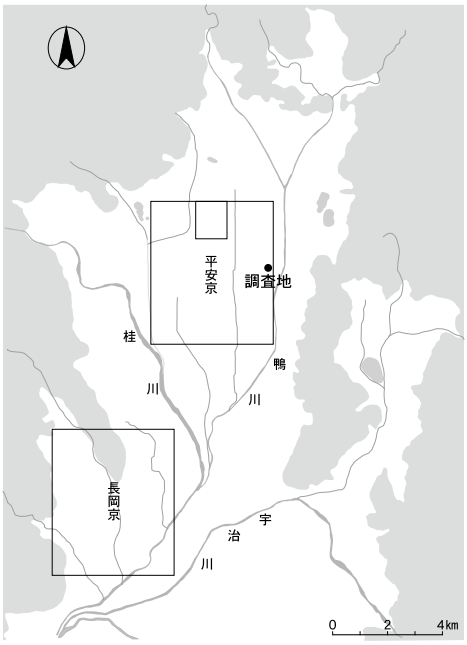
令和２年12月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	平安京跡　（京都市番号　19Ｈ272）
2	調査所在地	京都市下京区四条通麩屋町西入立売東町28番地の２ 他
3	委　託　者	株式会社　竹中工務店　京都支店　支店長　名越健二
4	調 査 期 間	2020年３月23日～2020年６月18日
5	調 査 面 積	258㎡
6	調査担当者	鈴木康高
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「三条大橋」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	鈴木康高 付章：丸山真史・関　晃史
14	分　　析	金属・ガラス製品の蛍光Ｘ線分析については北野信彦氏（龍谷大学教授）、骨の分析については丸山真史氏（東海大学准教授）にご協力いただいた。骨の分析結果は、付章に掲載した。
15	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
16	協　力　者	調査・整理作業にあたっては下記の方々からご教示頂いた。記して謝意を表します。 網　伸也、尾野善裕、木立雅朗、北野信彦、國下多美樹、西山良平、能芝　勉、平尾政幸、丸山真史（五十音順、敬称略）



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）調査の経過 …… 2
２．位置と環境 …… 4
（１）歴史的環境と立地 …… 4
（２）既往の調査 …… 4
３．遺　　構 …… 7
（１）基本層序 …… 7
（２）平安時代中期中葉の遺構（第４－２面・第４－１面） …… 7
（３）平安時代中期後葉の遺構（第３面） …… 8
（４）平安時代後期から鎌倉時代の遺構（第２－２面・第２－１面） …… 11
（５）室町時代の遺構（第２－１面・第１面） …… 12
（６）江戸時代の遺構（第１面） …… 13
４．遺　　物 …… 15
（１）遺物の概要 …… 15
（２）土器類 …… 15
（３）鍛冶関連遺物 …… 25
（４）金属製品 …… 25
（５）石製品 …… 27
（６）ガラス製品 …… 28
５．ま と め …… 29
付章　動物遺存体について …… 31

図　版　目　次

図版１　遺構　第４－２面遺構平面図（１：100）
図版２　遺構　第４－１面遺構平面図（１：100）
図版３　遺構　第３面遺構平面図（１：100）
図版４　遺構　第２－２面遺構平面図（１：100）
図版５　遺構　第２－１面遺構平面図（１：100）
図版６　遺構　第１面遺構平面図（１：100）

図版７　遺構　北壁断面図（１：100）
図版８　遺構　西壁断面図（１：100）
図版９　遺構　路１～４断面図〔セクション部分〕（１：40）
図版10　遺構　土坑117、石室119、タタキ130実測図（１：40、１：50）
図版11　遺構　１　１区 第４－１面全景（西から）
　　２　１区 路４（北から）
図版12　遺構　１　１区 第４－２面 路４、溝388（北東から）
　　２　１区 富小路：路１～４断面（南東から）
図版13　遺構　１　１区 路４路面（北から）
　　２　１区 溝337（北から）
　　３　１区 第３面全景（西から）
図版14　遺構　１　１区 路３（北から）
　　２　１区 溝236、門１、路３（北から）
　　３　１区 門１断面（南東から）
　　４　１区 柱穴225（北から）
図版15　遺構　１　１区 第２－２面全景（西から）
　　２　１区 第２－１面全景（西から）
図版16　遺構　１　１区 路２（北西から）
　　２　１区 布掘り148、礎石138（北から）
　　３　１区 礎石138（南から）
　　４　１区 路２掘下げ 水晶出土状況（北西から）
図版17　遺構　１　１区 第１面全景（西から）
　　２　１区 路１（北西から）
　　３　１区 石室119（北から）
図版18　遺構　１　１区 タタキ130（北西から）
　　２　１区 石131～134（北から）
　　３　１区 土坑117遺物出土状況（北から）
　　４　２区 全景（北から）
図版19　遺物　土器類１
図版20　遺物　土器類２
図版21　遺物　土器類３
図版22　遺物　土器類４
図版23　遺物　土器類５
図版24　遺物　鍛冶関連遺物、金属製品、ガラス製品

挿　図　目　次

図１　調査地及び周辺調査位置図（１：2,500）　……　1
図２　調査区配置図（１：500）　……　2
図３　調査前全景（南西から）　……　3
図４　作業状況（東から）　……　3
図５　路断面剥ぎ取り作業（南東から）　……　3
図６　埋め戻し後全景（北西から）　……　3
図７　京都盆地北部の扇状地（１：60,000）　……　5
図８　門１、柱穴225実測図（１：40）　……　9
図９　塀１・２実測図（１：80）　……　10
図10　溝172断面図（１：40）　……　11
図11　布掘り148・礎石138実測図（１：50）　……　12
図12　土坑205実測図（１：40）　……　13
図13　遺物包含層出土土器実測図（１：４）　……　15
図14　平安時代から室町時代の土器実測図（１：４）　……　17
図15　土坑125出土土器実測図（１：４）　……　18
図16　石室119出土土器実測図、タタキ130出土土器実測図１（１：４）　……　20
図17　タタキ130出土土器実測図２（１：４）　……　21
図18　土坑31・117出土土器実測図（１：４）　……　22
図19　土坑15出土土器実測図（１：４）　……　23
図20　土坑18・176出土土器実測図（１：４）　……　24
図21　鍛冶関連遺物実測図（１：４）　……　26
図22　金属製品実測図（１：２）　……　27
図23　銭貨拓影（１：１）　……　27
図24　石製品実測図（１：４）　……　28
図25　ガラス製品実測図（１：２）　……　28

表　目　次

表１　遺構概要表 …… 7
表２　遺物概要表 …… 15

付　表　目　次

付表１　土器一覧表 …… 34
付表２　タタキ130出土鉄滓一覧表 …… 39

平安京左京四条四坊十二・十三町跡、富小路跡

１．調査経過

（１）調査に至る経緯（図１）

本調査は、オフィスビル建替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地点は、平安京左京四条四坊十二・十三町跡及び富小路跡にあたる。

工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）による試掘調査が行われ、平安時代から室町時代にかけての遺構・遺物が確認されたため、文化財保護課から原因者に対し発掘調査が必要であるとの指導がなされた。調査は原因者から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った。

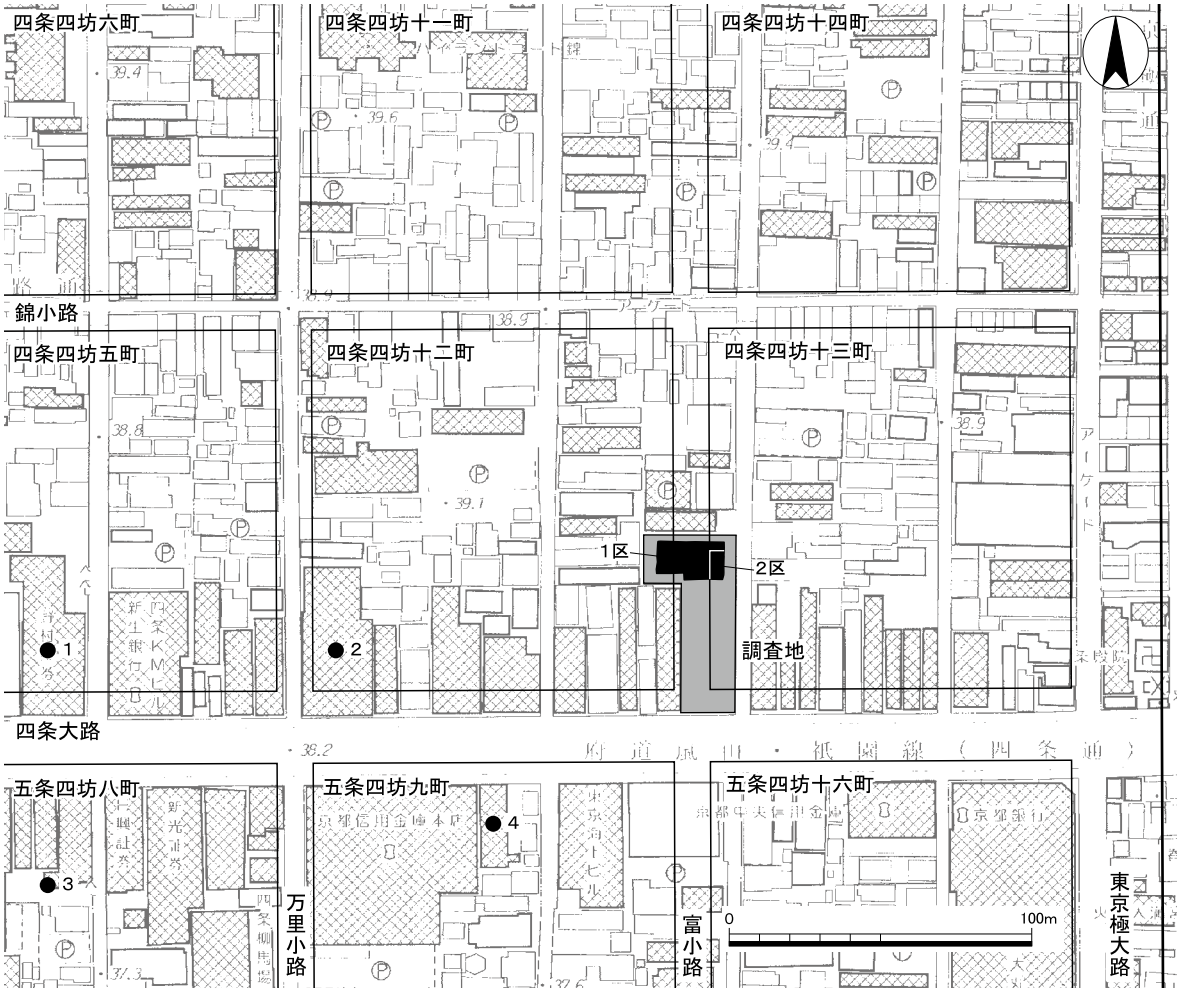


図１　調査地及び周辺調査位置図（１：2,500）

（２）調査の経過（図２～６）

調査は2020年３月23日に開始した。調査区は、調査地への進入路を確保するため２区に分け、西側の１区から調査を開始し、続いて南東部の２区の調査を行った。調査面積は258㎡である。現代盛土から近世整地層までを重機により掘削し、地表下1.3～1.4ｍで室町時代の遺構面を検出した。調査は、１区については、第１面（室町時代から江戸時代）、第２面（平安時代後期から鎌倉時代）、第３面（平安時代中期後葉）、第４面（平安時代中期中葉）の計４面の調査を行い、第２面と第４面については、遺構の重複関係や時期の異なる遺構を検出したため、さらに２時期に分けて調査を行った。２区については、遺構の残存状況が不良であったため、１区第４面に相当する遺構面での１面調査とした。

調査成果としては、平安時代中期中葉から室町時代までの富小路とその側溝、平安時代中期後葉の門跡、江戸時代以降の井戸・石室・タタキ・土坑などを検出した。第１面から第４面まで順次各遺構面で遺構検出を行い、検出遺構は人力で掘削した。掘削後は図面作成・写真撮影などの記録作業を行った。調査後は埋め戻しを行い、2020年６月18日にすべての作業を終了した。

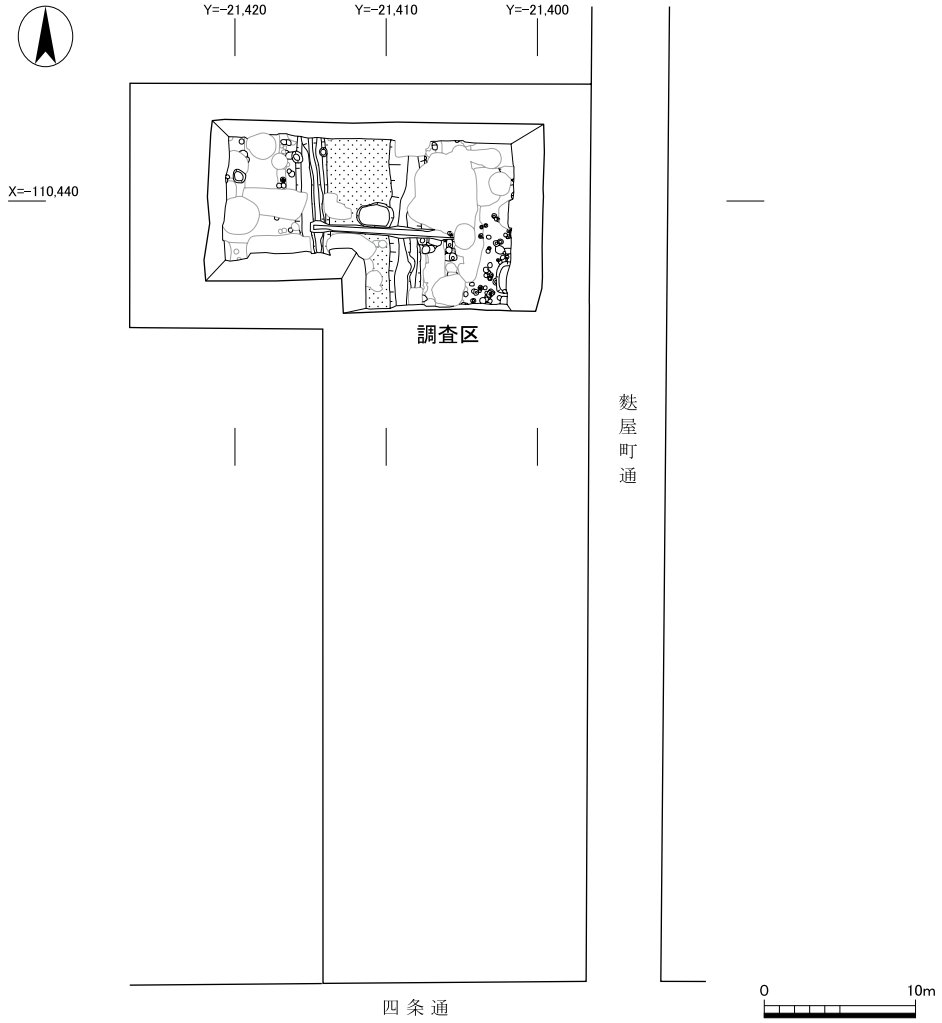


図２　調査区配置図（１：500）

図３　調査前全景（南西から）

図４　作業状況（東から）

図５　路断面剥ぎ取り作業（南東から）

図６　埋め戻し後全景（北西から）

調査中は、適宜、文化財保護課による臨検を受けた。また、検証委員である立命館大学の木立雅朗教授と近畿大学の網伸也教授による検証を受けた。

２．位置と環境

（１）歴史的環境と立地（図７）

平安京は京都盆地北部のほぼ中央に位置し、東西を鴨川と桂川の２つの河川によって挟まれている。京内の地形は、鴨川・桂川やその他の小河川によって形成された複数の扇状地からなる[1)]。平安京左京の町小路から富小路までは、平安京の北端から六条大路に向かって低くなる賀茂川・鴨川の扇状地堆積物が舌状の微高地を形成するが、京の東端である東京極大路は鴨川により開析されたと考えられる低地に位置する。調査地は鴨川の西側に位置し、この鴨川扇状地の微高地上の東端に位置する。調査地は、平安京左京四条四坊十二・十三町、富小路にあたる。平安京条坊復元プランでは、調査区中央部に富小路、その東西両側に十二町の東端、十三町の西端が位置する。十二町の北は錦小路、東は富小路、南は四条大路、西は万里小路、十三町の北は錦小路、東は東京極大路、南は四条大路、西は富小路に面する。十三町は条坊街区の東端に位置する。調査区は、四条通から麩屋町通を北に約60ｍ進んだ西側に位置する。この麩屋町通は豊臣秀吉による京都改造政策の一環であるいわゆる天正地割により新設された路で、平安京の条坊街路である富小路より東側に位置する。通り名の変遷としては、寛文５年（1665）以前には白山通と言われていた時期もあることがわかる[2)]。平安時代から中世にかけての関連する史料は、現在のところみられない。江戸時代以降については、多数の史料がみられるが、調査地とその周辺の土地利用がわかる史料として『京雀』などがあり[3)]、周辺で多種多様な生産活動が行われ、商工業地として繁栄していた様子がわかる。ただし、調査地自体の土地利用については明らかではない。

（２）既往の調査（図１）

調査地が位置する平安京左京四条四坊域では、発掘調査件数が少なく、面的に遺構・遺物の様相を把握することが難しい。

調査１では平安時代前期の整地層、前期から中期にかけての柱穴・土坑、平安時代後期・鎌倉時代・室町時代後半・江戸時代の各時期の遺構が検出されているが、各時期に対応する遺構の詳細は不明である[4)]。

調査２では平安時代中期後半以前の湿地、平安時代後期の建物・井戸・土坑・四条大路北側溝、鎌倉時代から室町時代前期の方形竪穴建物・井戸・溝・土坑・柱穴、室町時代中期から安土桃山時代の井戸・土坑・柱穴などが検出されており、四条大路の整備や宅地利用の時期が平安時代後期になってから行われることが明らかになっている[5)]。

調査３では弥生時代の遺物包含層、飛鳥時代の竪穴建物、平安時代中期後葉から江戸時代までの各時期の遺構が検出されているが、各時期に対応する遺構の詳細は不明である[6)]。

調査４では平安時代前期の整地層・土坑・ピット、平安時代中期後半の整地層・井戸・土坑・ピット、室町時代の井戸・土坑・ピット、安土桃山時代から江戸時代までの井戸・塀・土坑・掘込

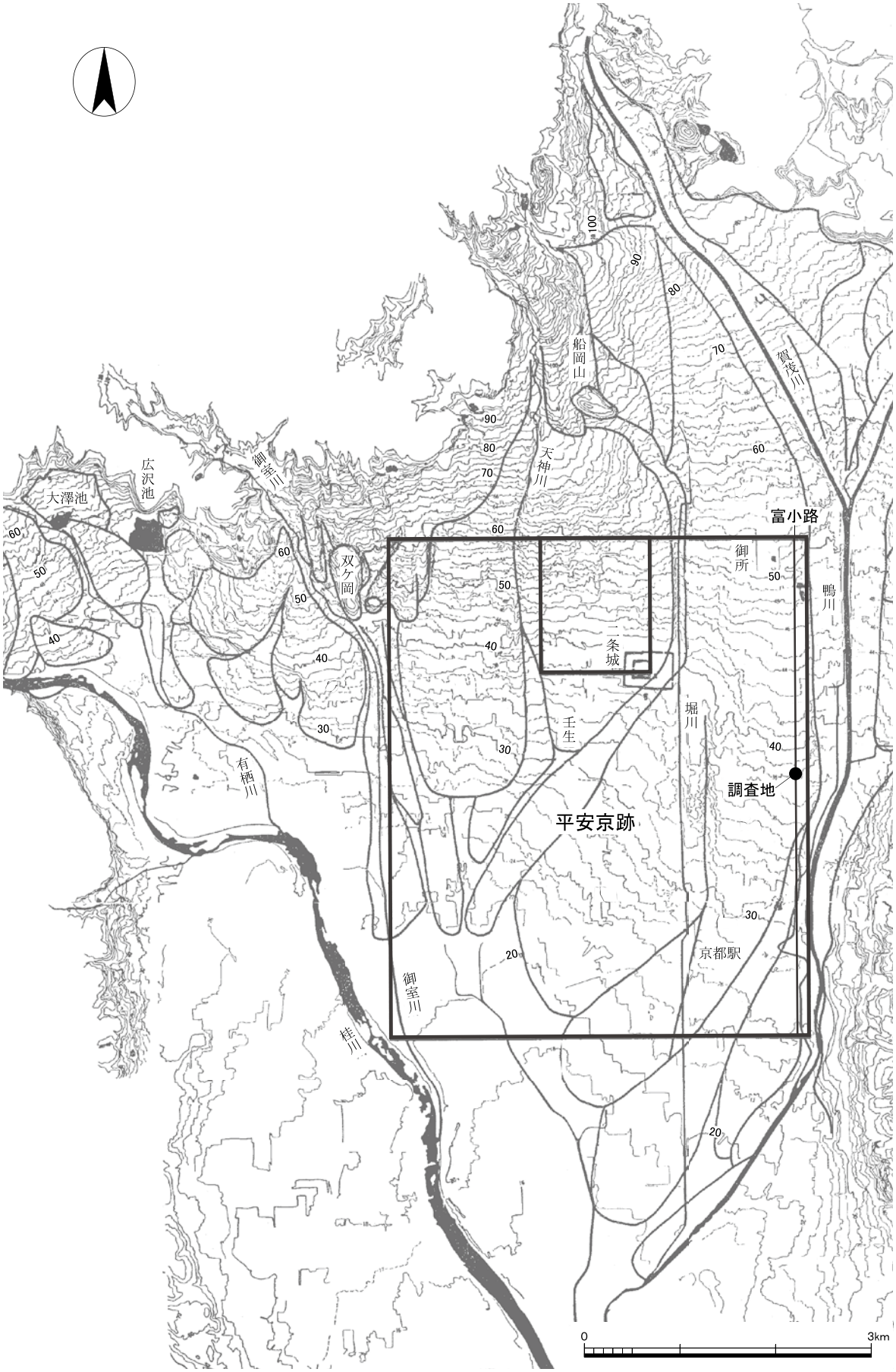


図７　京都盆地北部の扇状地（１：60,000）

みなどが検出されている。鎌倉時代から室町時代前半にかけての遺構数は少ない。特徴的な遺物として、江戸時代の前期後半の土坑31から一分金が１点出土している[7)]。

註

１）　石田志郎「京都盆地北部の扇状地－平安京遷都時の京都の地勢－」『古代文化』第34巻12号　1982年

２）　『京雀』巻第二　寛文５年（『新修京都叢書』第１巻　臨川書店　1967年）

３）　江戸時代の工芸分野に関連する周辺の様相については、洲鎌佐智子・横山和弘「都諸職名匠名鑑（工芸編）」『近世都の工芸』　京都文化博物館　2007年を参考にした。

４）　「平安京左京四条四坊」『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1988年

５）　「平安京左京四条四坊」『平成12年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003年

６）　「平安京左京五条四坊」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1991年

７）　「平安京左京五条四坊」『平成２年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年

３．遺　　構

（１）基本層序（図版７・８）

調査地は現状で、現代盛土のためほぼ平坦になっており、標高38.7～38.8ｍである。現地表面から0.4～1.2ｍの現代盛土があるが、調査区西端では、近現代から現代までの盛土が連続して積み重なる。その下に厚さ0.2～1.0ｍ程度の江戸時代整地層がある（図版８－西壁４～６・10・11・21～25・27・28・35・36・39・40、図版７－北壁４～６・８～10・14～20）。この下に、室町時代整地層、鎌倉時代整地層、平安時代後期整地層、平安時代中期整地層、飛鳥時代遺物包含層、地山となる。遺物包含層上面の標高は36.8～36.9ｍ、地山上面の標高は36.7ｍである。

室町時代整地層（図版７－北壁33～35）上面を第１面、鎌倉時代整地層（図版７－北壁47）上面を第２－１面、平安時代後期整地層（図版７－北壁55～58）上面を第２－２面、平安時代中期整地層（図版７－北壁70～72・84）上面を第３面、飛鳥時代遺物包含層（図版７－北壁85）上面を第４面とした。第２面については、整地がなされているものの、路２が一定期間存続し、共通の遺構と理解できることから、別個の面とはせずに第２面を細分した。また、第４面は、溝の新旧ならびに路の拡幅に伴う時期差を第４－１面・第４－２面とした。

（２）平安時代中期中葉の遺構（第４－２面・第４－１面、図版１・２）

第４面では、路４に対応する時期の異なる富小路の側溝を検出した。富小路施工当初の遺構を第４－２面、東側溝を埋め、路４を拡張しながら新たに東側溝を整備した時期を第４－１面とした。

路４（図版９・12・13）　調査区中央部で検出した。東端は第３面の溝334に掘り込まれ残存しない。南北ともに調査区外に広がる。検出範囲は、東西4.5ｍ、南北11.4ｍである。上面標高は36.9～37.04ｍ程度で、南北方向はほぼ平坦、路の両端部がわずかに低くなる。路面には暗オリーブ褐色の砂泥を薄く敷き、そこに礫が固く叩き締まる。用いられた礫の大きさは、長軸２～３㎝程度の

表１　遺構概要表

時　　代	遺　　構
飛鳥時代	遺物包含層
平安時代中期中葉	路４、溝337・338・388
平安時代中期後葉	路３、溝223・224・236・334、門１、塀１・２、柱穴225、井戸238
平安時代後期 ～鎌倉時代	路２、溝126・149・172・174・199、布掘り148、礎石138
室町時代	路１、溝112・121、土坑94・159・205
江戸時代	石室119、タタキ130、土坑15・18・31・117・125・176

礫を主とし、長軸４～７㎝の礫がわずかに混じる。路盤には褐色シルトに細砂混じりの土を用い、固く締まる。礫や土器類はほとんど混じらない。層厚0.04ｍ程度で非常に薄い。土質は、下層の飛鳥時代遺物包含層の土質と近い。遺物は、土器類・瓦・骨がわずかに出土した程度で、ほとんど遺物が混じらない。出土遺物から時期を決めることは難しい。

溝337（図版13）　調査区西部、路４の西側で検出した南北方向の溝である。南北ともに調査区外に広がる。検出長7.8ｍ、検出幅約２ｍ、深さ0.5～0.8ｍである。底部の標高は36.1～36.5ｍで、全体的に凹凸があるものの、北から南に向かって傾斜する。遺物は、３Ｃ段階の土器類がわずかに出土した。

溝338　調査区中央部、路４の東側で検出した南北方向の溝である。南北ともに調査区外に広がる。検出長約９ｍ、検出幅0.6～0.9ｍ、深さ0.1～0.2ｍである。底部の標高は36.6～36.7ｍである。遺物は、３Ｃ～４Ａ段階の土器類がわずかに出土した。

溝388　調査区中央部、路４の東側で検出した南北方向の溝である。南北ともに調査区外に広がる。検出長約11ｍ、検出幅2.0～2.4ｍ、深さ0.8～0.9ｍである。底部はほぼ平坦で、明らかな傾斜はみられない。底部の標高は36.1～36.2ｍである。遺物は、３Ｃ段階の土器類がわずかに出土した。

（３）平安時代中期後葉の遺構（第３面、図版３）

この時期の遺構は第３面で路・溝・塀・門・土坑・多数の柱穴などを検出した。

路３（図版９・14）　調査区中央部で検出した。南北ともに調査区外に広がる。検出範囲は、東西4.0～4.2ｍ、南北11.4ｍである。上面標高は37.05～37.2ｍ程度で、北から南に向かってわずかに傾斜する。また、東西方向については、中央部が高く東西両端部がわずかに低くなる薄い蒲鉾状となる。路面には暗オリーブ色シルトを薄く敷き、礫を固く叩き締める。厚さは２～３㎝程度である。用いられた礫の大きさは、長軸２～５㎝程度の礫を主とし、長軸５～９㎝程度の礫が少量混じる。路盤については、その構築方法を確認することができた。路盤は、路４路面上面から積み始め、路の東西両端部に高さ0.1ｍに土手状の土を積み、この間の窪みを直径５㎝程度の礫が多く混じる暗褐色シルトで埋め、上面を平らにした後で路面を構築する。遺物は、土器類が出土したが細片である。他に・瓦類・骨なども出土した。最も新しい時期の土器片は３Ｃ～４Ａ段階と考えられ、この時期以降に路が構築されたと考えられる。他の路から出土した骨に比べて残存状態が良好なものが多い。

溝223　調査区西部、路３の西側で検出した南北方向の溝である。西側は第２－２面の溝199によって掘り込まれるため、西肩は検出できていない。南北ともに調査区外に広がる。検出長7.9ｍ、検出幅0.3～0.5ｍ、深さ0.3ｍである。底部の標高は36.75～36.95ｍで、全体的に凹凸がある。遺物は、４Ｂ段階の土器類がわずかに出土した。

溝224　調査区中央部、路３の西側で検出した南北方向の溝である。西側は溝223によって掘り込まれる。南北ともに調査区外に広がる。検出長7.9ｍ、検出幅0.7～0.8ｍ、深さ0.1～0.2ｍである。底部の標高は36.9～37.0ｍである。遺物は、４Ａ段階の土器類がわずかに出土した。

溝236　調査区中央部、路３の東側で検出した南北方向の溝である。北側は井戸238、南側は土坑によって掘り込まれるが、南北ともに調査区外に広がると考えられる。検出長9.9ｍ、検出幅0.5～0.8ｍ、深さ0.1～0.2ｍである。底部の標高は36.7～36.8ｍである。門１の前面にあたる溝の西肩で、部分的に護岸されていた痕跡がみられたが、残存状況は不良であったため構造まで把握することはできなかった。門を意識した部分的な補強と考えられる。遺物は、４Ｂ段階の土器類がわずかに出土した。

溝334　調査区中央部、路３の東側で検出した南北方向の溝である。東側は溝236によって掘り込まれる。北側は井戸238によって掘り込まれるが、南北ともに調査区外に広がると考えられる。検出長9.9ｍ、検出幅0.5～0.6ｍ、深さ0.1～0.2ｍである。底部の標高は36.7～36.9ｍである。遺物は、４Ａ段階の土器類がわずかに出土した。

門１（図８、図版14）　調査区南部で、路２の路盤を掘り下げたところで検出した。路３に面して開く西向きの門である。２基の礎石が南北に並び、柱間は1.5ｍである。礎石の規模は、礎石303が南北0.5ｍ、東西0.3ｍ、厚さ0.2ｍ、礎石304が南北0.4ｍ、東西0.45ｍ、厚さ0.2ｍである。礎石304の下部には直径0.1～0.2ｍの石材が根石として置かれているが、対になる礎石303の下部にはみられない。据え付ける面の土質の状況に合わせて施工方法を工夫していると考えられる。礎石据付け穴はみられず、溝334を埋めながら礎石を据え付けている。そのため、溝236西肩でみられた部分的な護岸（図版14－２）は、礎石を据え付ける際に使用した土留め的な性格も併せもつ可能性がある。門１の南北の延長線上には柵や塀といった区画施設はみられない。門１の東側2.1ｍのところに南北方向の塀２が位置しており、この塀に取り付くように溝236をまたいで、門１が張り出すように構築されていたものと考えられる。

塀１（図９）　調査区西部で検出した南北方向の塀である。方位は北に対してわずかに東に振る。多数の柱穴が重複することから複数回の修復が行われたようである。検出長は10.5ｍである。その

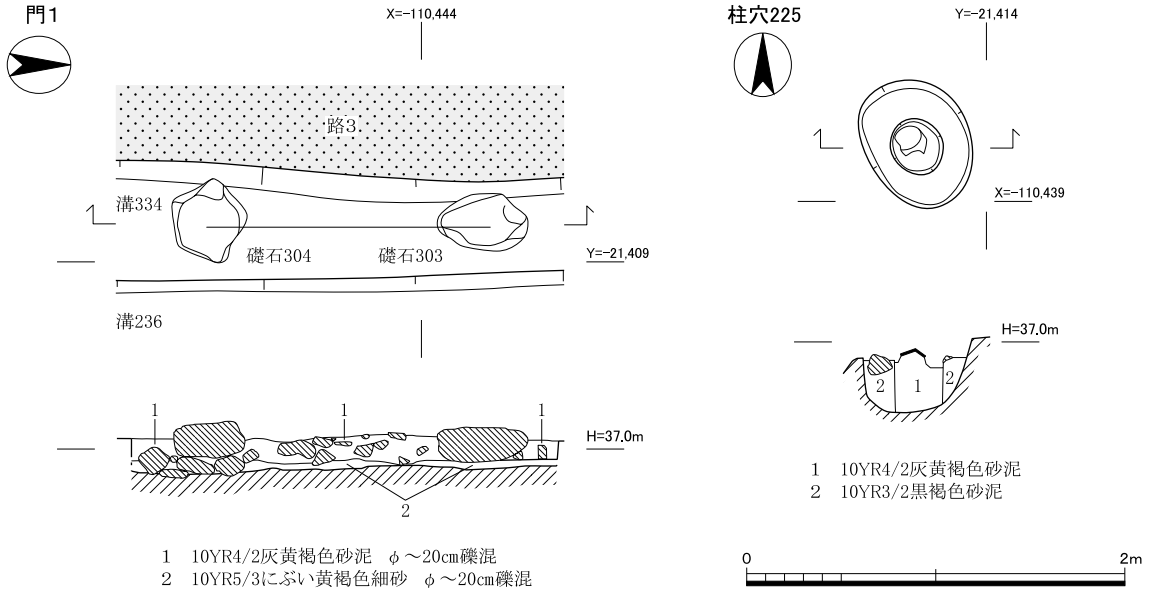


図８　門１、柱穴225実測図（１：40）

規模は４間、柱間は1.5ｍ程度の等間に復元できる。柱穴の掘形は直径0.2～0.5ｍ円形で、深さは0.1～0.3ｍ。

塀２（図９） 調査区東部で検出した南北方向の塀である。方位は北に対してわずかに東に振る。多数の柱穴が重複することから複数回の修復が行われたようである。検出長は10.5ｍである。その規模は４間、柱間は0.9ｍ程度の等間に復元できる。柱穴の掘形は直径0.2～0.4ｍ円形で、深さは0.1～0.3ｍ。

柱穴225（図８、図版14） 調査区西部で検出した。溝223・224の埋土を完掘したところで検出した。平面形は円形で、掘形の規模は直径0.6ｍ、深さ0.3ｍ、柱当の直径0.3ｍ、深さ0.3ｍである。柱当からは須恵器の壷の底部が逆位で出土した。遺物は、４段階の土器類がわずかに出土した。

井戸238 調査区中央部北壁際の路２を掘り下げたところで検出した。北側は調査区外に広がるが、掘形の平面形は方形に復元できる。その検出規模は南北1.2ｍ、東西2.1ｍである。検出面から底部までの深さは1.8ｍで、底部の標高は35.3ｍである。井戸枠は確認できず、調査区外に位置すると考えられる。遺物は、５Ａ段階の土器類が出土した。

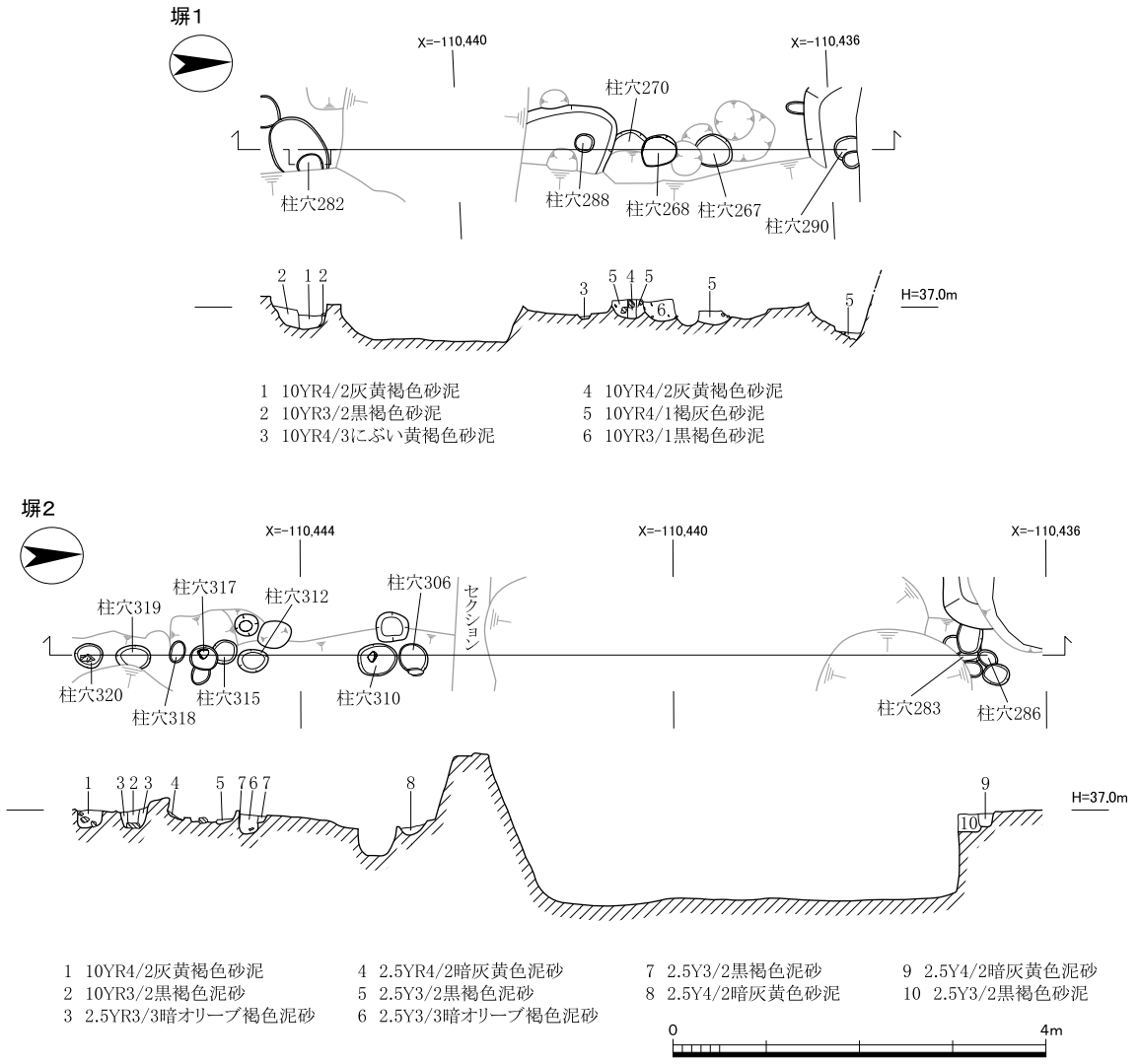


図９ 塀１・２実測図（１：80）

（４）平安時代後期から鎌倉時代の遺構（第２－２面・第２－１面、図版４・５）

第２面では、路２に対応する時期の異なる富小路の側溝ないしは宅地内の内溝を検出した。平安時代後期から鎌倉時代初頭にかけての遺構を第２－２面、それ以降を第２－１面とする。

第２－２面（図版４）

第２－２面では路・溝・柱穴などを検出した。

路２（図版９・16）　調査区中央部で検出した。南西部は現代撹乱によって残存していなかった。南東部も路面は現代撹乱に削平され、路盤が残存していた状況である。南北ともに調査区外に広がる。検出範囲は、東西5.0～5.3ｍ、南北11.5ｍである。上面標高は中央部で37.2～37.3ｍ、ほぼ平坦で、東西両端はわずかに低くなる。路面には礫を用い、固く締まる。用いられた礫の大きさは、長軸２～５㎝と長軸５～７㎝である。路盤には黄褐色砂泥を用い、固く締まる。直径0.1ｍまでの礫が多量に混じる。層厚0.1ｍ程度である。路面と路盤から土器類が出土したが、特に路盤には須恵器甕や輸入陶磁器白磁片が多く混じる。路盤構築材として利用されたものと考えられる。遺物は、土器類・瓦類・鉄製品・石製品・骨などが出土した。出土した土器類の時期は大半が４段階であるが、わずかに５Ａ段階と判断できる土器類も含まれる。

溝172（図10）　調査区西部で検出した南北方向の溝である。南端部は第１面のタタキ130によって掘り込まれる。検出長6.8ｍ、検出幅2.1～2.4ｍ、深さ約0.5ｍである。底部の標高は36.6～36.7ｍである。遺物は、５Ｂ段階の土器類が出土した。

溝174　調査区東部で検出した南北方向の溝である。中央部は現代撹乱によって残存していなかった。南北ともに調査区外に広がる。検出長11.1ｍ、検出幅1.0～1.4ｍ、深さ0.5～0.6ｍである。底部の標高は36.6ｍ前後である。遺物は、６Ａ段階の土器類が出土した。

溝199　調査区中央部、路２の西側で検出した南北方向の溝である。南半部は第２－１面の土坑205によって掘り込まれ残存していなかったが、南北ともに調査区外に広がると考えられる。検出長3.7ｍ、検出幅0.7～1.1ｍ、深さ0.3～0.4ｍである。底部の標高は36.7ｍ前後である。遺物は、６Ａ段階の土器類が出土した。

第２－１面（図版５）

第２－１面では路・溝・布掘り・礎石・柱穴などを検出した。路２については、第２－２面で報告したため、ここでは省略する。

溝126　調査区中央部、路２の東側で検出した南北方向の溝である。南端部は土坑によって掘り込まれる。南北ともに調査区外に広がると考えられる。検出長9.8ｍ、検出幅0.7～0.8ｍ、深さ0.2ｍである。底部の標高は37.0～37.1ｍである。遺物は、６Ｂ～Ｃ段階の土器類が出土した。

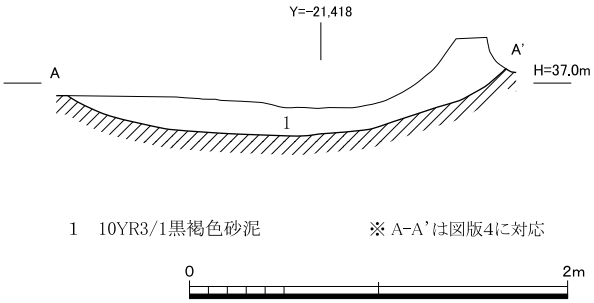


図10　溝172断面図（１：40）

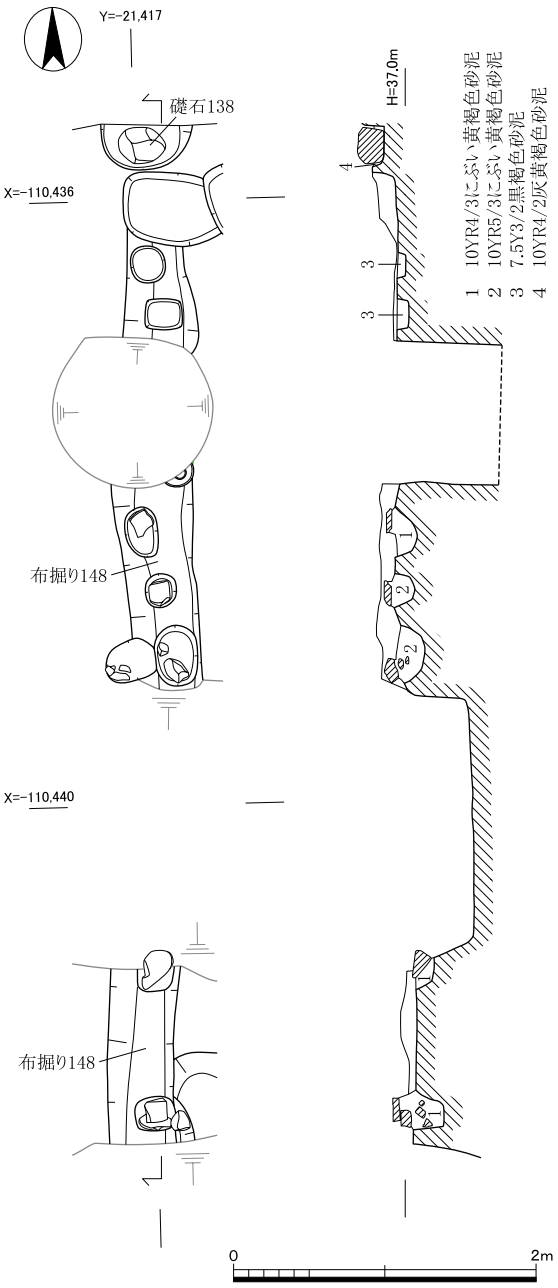


図11　布掘り148・礎石138実測図（1：50）

溝149　調査区中央部、路２の西側で検出した南北方向の溝である。北端部は後述する土坑176、南端は土坑159によって掘り込まれる。南北ともに調査区外に広がると考えられる。検出長6.0ｍ、検出幅0.7～0.8ｍ、深さ0.2～0.3ｍである。底部の標高は37.1ｍ前後である。遺物は、６Ｂ～Ｃ段階の土器類が出土した。

布掘り148（図11、図版16）　調査区西部、富小路西築地心推定ライン上で検出した南北方向の布掘り礎石列である。布掘り掘形の規模は、検出長5.7ｍ、検出幅0.5ｍ、深さ0.1～0.2ｍである。中央部は試掘坑、南部はタタキ130に掘り込まれ残存していない。布掘りの内部には0.15～0.2ｍ程度の扁平な礎石を0.5ｍ程度の間隔で据えていたと考えられる。北半部では礎石がみられないため、抜き取られたものと考えられる。礎石は５石分確認できた。南端の礎石は上下２段に重なる。遺物の出土量がわずかであったため、時期を決めることは難しいが、概ね鎌倉時代後期から室町時代初頭と考えられる。

礎石138（図11、図版16）　調査区西部北壁際、布掘り148と同様に富小路西築地心推定ライン上で検出した。礎石据付け穴の北側は調査区外に広がるが、平面形は円形に復元することができる。その規模は直径0.6ｍ、深さ0.2ｍである。礎石の規模は、南北0.2ｍ、東西0.3ｍ、厚さ0.2ｍである。布掘り148の延長線上に位置し、かつ布掘り148内の礎石が0.5ｍ間隔で並ぶとすると、礎石138はそれと同じ間隔上にもあたり、関連する遺構と考えられる。布掘り148内の礎石に比べ規模が大きく、礎石上面の標高も高いことから、門の礎石の可能性も考えられる。

（５）室町時代の遺構（第２－１面・第１面、図版５・６）

この時期の遺構は第１面で路・溝・土坑・多数の柱穴などを検出したが、一部は第２－１面で検出している。

路１（図版９・17）　調査区中央部で検出した。南半部は現代撹乱によって残存していなかった。北側は調査区外に広がる。検出範囲は、東西4.5ｍ、南北6.5ｍである。上面標高は中央部で37.3～

37.4ｍとほぼ平坦である。路面には礫を用い、固く叩き締まる。用いられた礫の大きさは、長軸２～４㎝と長軸４～９㎝である。路盤には黒褐色砂泥を用い、固く締まる。直径20㎝までの礫が多量に混じる。層厚0.1～0.12ｍである。遺物は路面と路盤から土器類の出土がわずかであったため、構築時期を決めることは難しいが、側溝の埋没時期を考えると鎌倉時代から室町時代と捉えうる。

溝121　調査区中央部、路１の東側で検出した南北方向の溝である。南半部は現代撹乱によって残存していなかった。北側は調査区外に広がる。検出長6.5ｍ、検出幅0.9ｍ、深さ0.05～0.1ｍである。底部の標高は37.2～37.3ｍである。遺物は、９Ａ～Ｂ段階の土器類が出土した。

溝112　調査区中央部、路１の西側で検出した南北方向の溝である。北端部は土坑176、南側は試掘坑によって掘り込まれる。検出長3.0ｍ、検出幅0.8ｍ、深さ約0.3ｍである。底部の標高は37.1ｍである。遺物は、９段階の土器類が出土した。

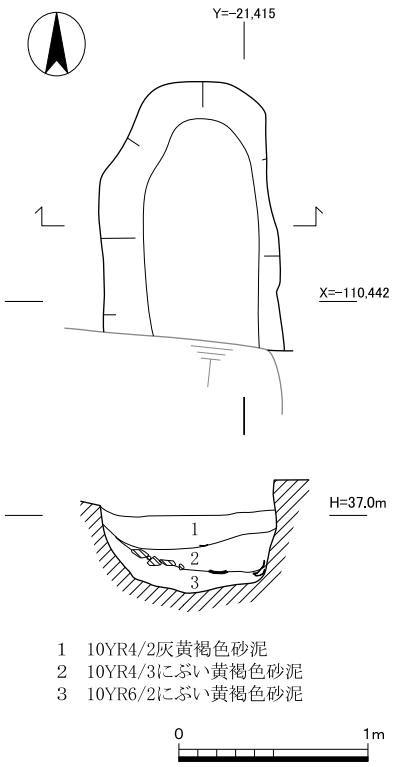


図12　土坑205実測図（１：40）

土坑159　調査区南西部で検出した。東側は土坑、西側はタタキ130によって掘り込まれ、南側は調査区外に広がる。その検出規模は、南北1.5ｍ、東西1.4ｍ、深さ0.2ｍである。遺物は、９Ｂ～Ｃ段階の土器類が出土した。

土坑205（図12）　調査区南西部で検出した。南側はタタキ130によって掘り込まれるが、平面形は南北方向に長い長方形に復元できる。その検出規模は、南北2.0ｍ、東西1.0ｍ、深さ0.65ｍである。遺物は、８Ｂ段階の土器類が出土した。

土坑94　調査区西部で検出した。東側・西側は井戸によって掘り込まれるが、平面形は円形に復元できる。その規模は、直径0.7ｍ、深さ0.2ｍである。遺物は、９Ｂ段階の土器類が出土した。

（６）江戸時代の遺構（第１面、図版６）

この時期の遺構は第１面で石室・土坑・タタキ・柱穴・井戸群を検出した。

石室119（図版10・17）　調査区中央部で検出した。平面形は南北方向に長い長方形で、掘形は南北1.1ｍ、東西1.0ｍ、石組の内法は南北0.8ｍ、東西0.45ｍ、検出面からの深さは0.45ｍである。壁体は直径0.2ｍまでの河原石を積み上げる。遺物は、11Ｂ段階の土器類が出土した。

土坑125　調査区中央部の石室119の西側で検出した。平面形は楕円形で、南北1.8ｍ、東西1.6ｍ、深さ1.3ｍである。埋土からまとまってはいないものの、組み物と考えられる同形同文の施釉陶器が５個体分出土した。遺物は、11Ｂ段階の土器類が出土した。

タタキ130（図版10・18）　調査区南西部で検出した。南側は調査区外に広がるため、平面形を復元することは難しい。表面には黄褐色シルトないしは砂質土を固く叩き締める。その規模は、南

北1.8ｍ、東西5.5ｍ、厚さは最大0.4ｍである。タタキ130の中央部には石131～134の４石が南北方向に並ぶ。石の大きさは0.3～0.5ｍ、厚さ0.3ｍ程度である。タタキや石131～134の４石を飛び石とみるならば、庭と考えることもできる。

さらに、タタキ130の下層には、土坑が位置する。タタキと土坑の関係は、西側は土坑掘形より外側にタタキが広がるが、北側と東側はタタキと土坑掘形の範囲が重なるため、無関係の遺構とは考え難い。下層の土坑は、南北1.5ｍ、東西4.6ｍ、深さ1.3～1.5ｍである。埋土は大きく３層に分けることができ、上層には褐色や黒褐色砂泥（図版10－10・11層）が0.2ｍ、中層には灰（図版10－12層）が0.3ｍ、下層には黒褐色や黄褐色砂泥にオリーブ褐色シルトや黄褐色細砂（図版10－13～16層）が層状に0.8～1.0ｍ堆積する。下層からは土器や鉄製品・鉄滓・鞴羽口などの鍛冶関連遺物がまとまって出土しており、その性格は廃棄土坑と考えうる。遺物は、11Ｂ段階の土器類が出土した。

タタキ130は本来、大型の廃棄土坑として掘削され利用されていたが、埋没する直前の窪み状の段階でその用途が変更され、庭として再整備された可能性も考えられる。

土坑31（図版10・18）　調査区南西部で検出した。南側は調査区外に広がるが、平面形は方形と考えられる。南北1.2ｍ、東西2.2ｍ、深さ0.8ｍである。掘形斜面上半に丸瓦や平瓦を貼り付け、暗褐色や黄褐色砂泥（図版10－５・６層）、黄褐色シルト（図版10－４層）の順で埋める。この黄褐色シルトはタタキ130のものと質などが似ていることや上面のレベルが揃うことなどから、タタキ130と一連ものと考えられる。黄褐色シルト層の窪みを評価するならば、庭を構成する池の可能性を考えたいが、池底の西半部ではシルト層が途切れてしまうことから、保水性に疑問が残る。遺物は、11Ｂ～Ｃ段階の土器類が出土し、タタキ130下層土坑よりも新しい。

土坑117（図版10・18）　調査区北西部で検出した。北側・東側を井戸、南側を土坑によって掘り込まれるが、平面形は南北に長い長方形に復元できる。その規模は、南北２ｍ以上、東西0.85ｍ、深さ0.3ｍである。遺物は、12Ａ段階の土器類が出土した。

土坑15　調査区西部で検出した。北側は試掘坑によって掘り込まれるが、平面形は方形に復元できる。その規模は、南北0.5ｍ以上、東西1.6ｍ、深さ0.4ｍである。埋土から茶入れがまとまって出土している。遺物は、主に12Ａ段階の土器類が出土した。

土坑18　調査区西部で検出した。北側は試掘坑によって失われているが、平面形は円形に復元できる。その規模は、直径0.7ｍ、深さ0.4ｍである。遺物は、12Ｂ段階の土器類が出土した。

土坑176　調査区中央部北壁際で検出した。北側は調査区外に広がるため、平面形は不明である。その検出規模は、南北0.2ｍ、東西1.3ｍ、深さ0.3ｍである。埋土には土器類が多量に混じり、一括廃棄されたものと考えられる。遺物は、13Ａ段階の土器類が出土した。

４．遺　　物

（１）遺物の概要

調査では整理コンテナにして85箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・土製品・鍛冶関連遺物・金属製品・石製品・ガラス製品・骨・貝などがある。出土遺物の大部分は土器類が占め、その他の種類は少ない。時代別では、平安時代中期、平安時代後期から鎌倉時代、江戸時代のものが多い。以下では主要な遺構から出土した遺物について種類ごとに概要を述べる。遺物の時期の表記は、土師器は平尾氏の土器編年案[1)]に拠る。

（２）土器類（図13～20、図版19～23、付表１）

飛鳥時代

遺物包含層出土土器（図13）　土師器・須恵器が出土した。土師器には杯（１）・皿（２・３）、須恵器には杯蓋（４）・杯身（５）がある。時期は７世紀前半に属すると考えられる。

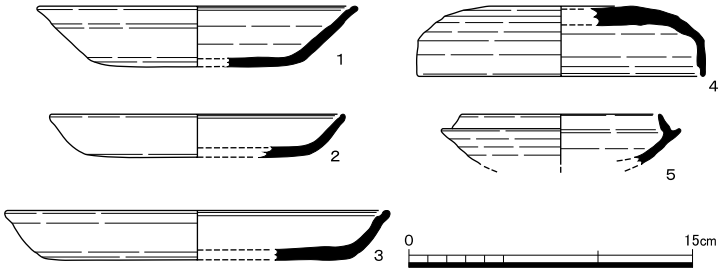


図13　遺物包含層出土土器実測図（１：４）

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
弥生時代	土器				
飛鳥時代	土師器、須恵器		土師器３点、須恵器２点		
平安時代中期	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、金属製品、銭貨、骨		土師器５点、灰釉陶器６点、銭貨３点		
平安時代後期～鎌倉時代	土師器、須恵器、灰釉系陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品、金属製品、骨		土師器24点、石製品１点		
室町時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、土製品、石製品、金属製品、骨・貝		土師器28点、瓦器１点、輸入陶磁器１点		
江戸時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、軟質施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦、土製品、鍛冶関連遺物、金属製品、石製品、ガラス製品、骨		土師器85点、瓦器３点、施釉陶器72点、軟質施釉陶器４点、焼締陶器５点、磁器15点、輸入陶磁器13点、鍛冶関連遺物９点、金属製品４点、石製品７点、ガラス１点		
合　計		112箱	292点（26箱）	１箱	85箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より27箱多くなっている。

平安時代中期

溝388出土土器（図14、図版20）　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・金属製品・骨が出土した。出土土器の大半は小片のため、図化できなかった。灰釉陶器には椀（６）がある。底部外面には、「大」の字状の墨書がある。埋没時期を示す土器よりはやや古手の様相を示す。時期は３Ｃ段階に属する。

溝338出土土器（図14）　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土した。図示できるのは灰釉陶器のみである。灰釉陶器には椀（７）がある。口縁部内面にのみ浸けがけによる釉がみられる。時期は３Ｃ～４Ａ段階に属する。

溝334出土土器（図14、図版19）　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土した。土師器には皿Ａ（８）・皿Ｎ（９）がある。灰釉陶器には椀（10・11）がある。時期は４Ａ段階に属する。

溝236出土土器（図14、図版19）　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土した。土師器には皿Ａ（12）・皿Ｎ（13）がある。時期は４Ｂ段階に属する。

ピット462出土土器（図14）　土師器・輸入陶磁器が出土した。土師器には皿Ａ（14）がある。時期は４段階に属する。

ピット365出土土器（図14）　灰釉陶器（15）が出土した。底部内面の全面と破面の一部にややピンクがかった赤色顔料が付着する。時期は４段階に属すると考えられる。

ピット374出土土器（図14）　土師器・灰釉陶器が出土した。灰釉陶器椀（16）の底部内面にはややピンクがかった赤色顔料が付着する。時期は４段階に属すると考えられる。

平安時代後期から鎌倉時代

溝172出土土器（図14、図版19）　土師器・須恵器・灰釉系陶器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器などが出土した。土師器には皿Ａc（17～19）・皿Ｎ（20～26）がある。皿Ａcは口径7.9～8.5㎝、器高1.2～1.4㎝である。皿Ｎは口径8.9～9.3㎝、器高1.5～1.7㎝（20～22）と口径13.6～14.4㎝、器高2.9～3.5㎝（23～26）の２群がある。時期は５Ｂ段階に属する。

溝174出土土器（図14、図版19）　土師器・須恵器・灰釉系陶器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器などが出土した。土師器には皿Ｎ（27～37）がある。皿Ｎは口径8.1～8.6㎝、器高1.3～1.5㎝（27～35）と口径12.8～13.1㎝、器高2.5～3.0㎝（36・37）の２群がある。時期は６Ｂ段階に属する。

溝199出土土器（図14）　土師器・須恵器・灰釉系陶器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器などが出土した。土師器には皿Ｎ（38～40）がある。口径8.7㎝、器高1.4～1.6㎝である。時期は６Ｂ段階に属する。

室町時代

土坑205出土土器（図14、図版19）　土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器などが出土した。土師器には皿Ｎ（41～50）・皿Ｓh（51～59）・皿Ｓ（60～61）がある。皿Ｎは口径7.6～8.0㎝、器高1.5～1.8㎝（41～44）と口径10.5～11.4㎝、器高2.2～2.5㎝（45～50）の２群がある。皿Ｓhの口径は6.4～6.9㎝、器高1.8～2.0㎝（51～59）。皿Ｓhには、底部中央の押上げがゆるいもの（51～54）と

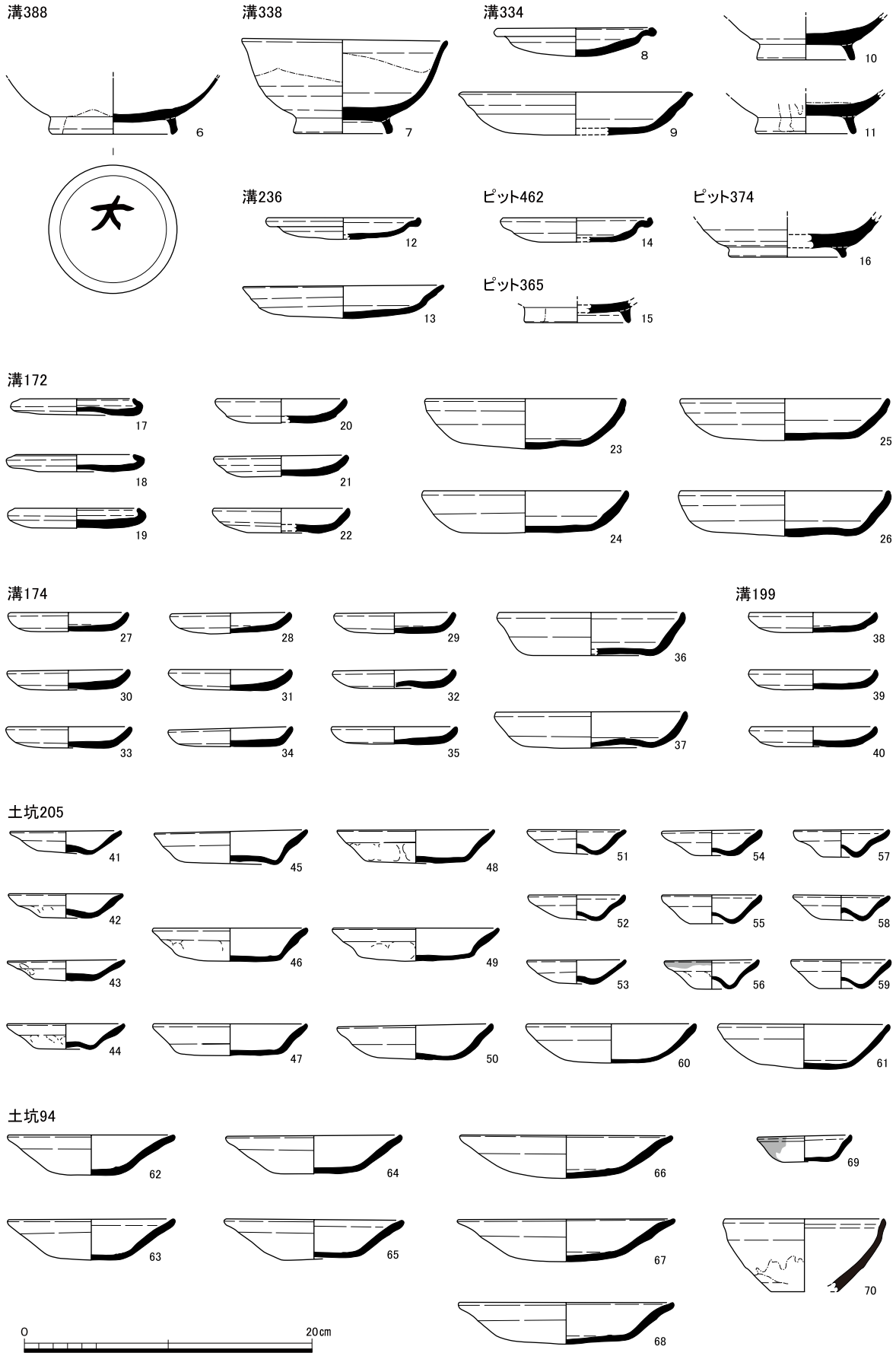


図14　平安時代から室町時代の土器実測図（１：４）

押上げが強いもの（55～59）がある。皿Ｓの口径は11.4～11.6㎝、器高2.7～3.1㎝（60・61）。時期は８Ａ段階に属する。

土坑94出土土器（図14、図版19）　土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入陶器が出土した。土師器には皿Ｓ（62～68）がある。皿Ｓは口径11.2～11.9㎝、器高2.6～2.8㎝（62～65）と口径14.5～14.8㎝、器高2.9～3.0㎝（66～68）の２群がある。瓦器には小杯（69）がある。輸入陶器には天目椀（70）がある。いわゆる禾目天目茶椀である。釉はやや赤みのかかった褐色で、胎土は黒褐色を呈する。時期は９Ｂ～Ｃ段階に属する。

江戸時代

土坑125出土土器（図15、図版20）　土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器などが出土した。土師器には皿Ｎ（71～72）・皿Sb（73）・皿Ｓ（74～83）・片口鉢（84）・焙烙鍋（85）・塩壷蓋（86）などがある。皿Ｎは口径6.0～6.7㎝、器高1.1～1.4㎝（71～72）、皿Ｓは口径10.5～11.4㎝、器高2.0～2.4㎝（74～80）と口径12.0～12.8㎝、器高2.1～2.5㎝（81～83）の２群がある。73の土師器皿の底部中央には直径３㎜の孔が１つある。84の土師器片口鉢の内面には15条の沈線を放射状に施す。施釉陶器には、瀬戸美濃系の椀（87）・台付皿（88）、唐津産の椀（89）などがある。台付皿は、同形同文のものが図示した以外に４点出土しており、５点で１セットであったと考えられる。焼締陶器には丹波産の鉢（90）などがある。瓦器には、火鉢（91）・蓋（92）がある。時期は11Ｂ段階に属する。

石室119出土土器（図16、図版20）　土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器などが出

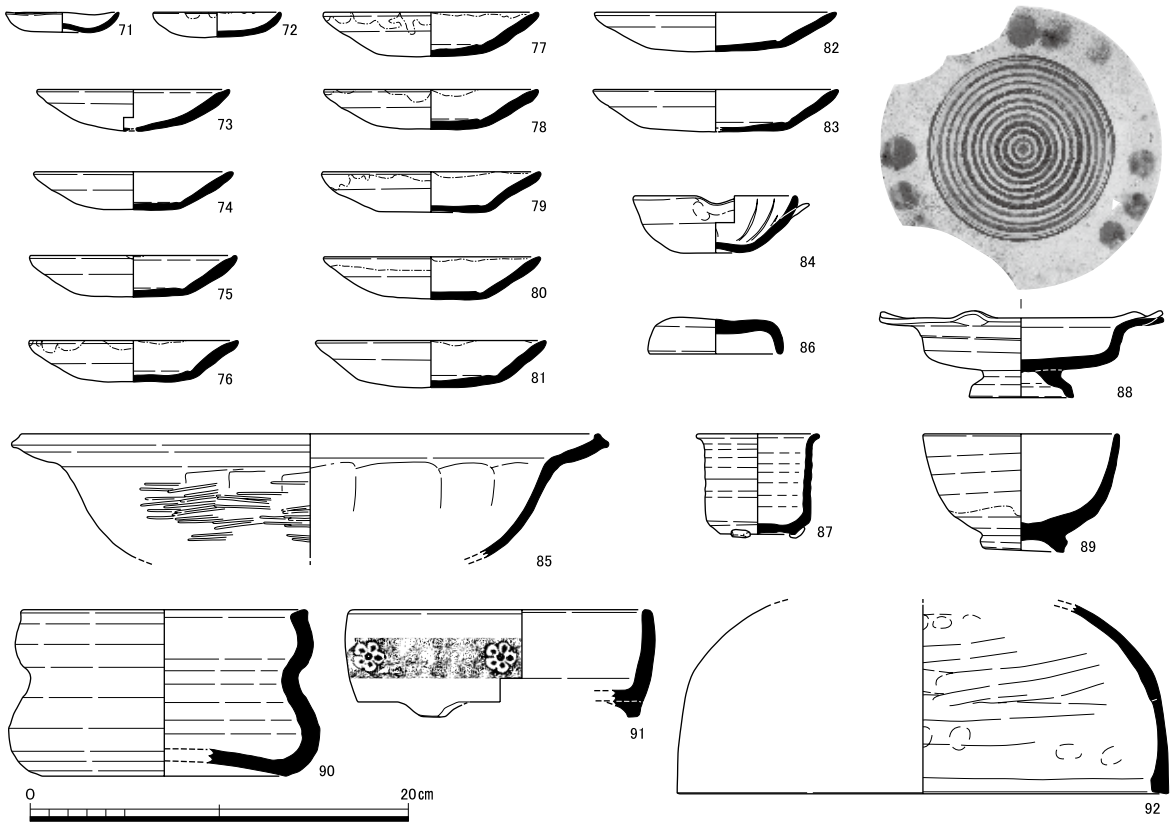


図15　土坑125出土土器実測図（１：４）

土した。土師器には皿N（93）・皿S（94～97）などがある。皿Sは口径10.6～10.7㎝、器高1.9㎝（94・95）と口径12.2～12.3㎝、器高2.2㎝（96・97）の２群がある。施釉陶器には、瀬戸美濃系の灰釉皿（98）・輪花椀（99）・天目椀（100）などがある。輸入陶磁器には、青花皿（101・102）がある。中国南方系の窯の製品と思われる。時期は11Ｂ段階である。

タタキ130出土土器（図16・17、図版21）　下層土坑から土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦類・鍛冶関連遺物・金属製品・砥石などが出土した。土師器には皿Sb（103）・皿S（104～111）・皿N（112）・小壷（113・114）・塩壷蓋（115・116）・塩壷（117・118）などがある。皿Sには口径10.2～11.3㎝、器高2.0～2.4㎝（105～110）と口径12.1㎝、器高2.3㎝（111）の２群がある。施釉陶器には、瀬戸美濃系の天目椀（119・120）・皿（121～126）・長石釉棗（127）・織部向付（128）などがある。皿には、鉄絵（124）・長石釉無文（121・122・125・126）・灰釉（123）がある。唐津産では椀（129～132）・皿（133～135）・小杯（136・137）などがある。133・134の口縁端部には鉄釉を施す。137の底部外面には順糸切り痕が残る。丹波産には壷（146）がある。146の壷の体部外面には沈線が５条廻る。体部内面には同心円文状の当て具痕が明瞭に残り、底部外面には一条のヘラ記号がある。内外面に鉄釉が施される。軟質施釉陶器には鉢（138）がある。輸入陶磁器には、青花椀（139～141）・青花皿（142）・赤絵鉢（143）・華南三彩魚形水滴（144）がある。140は景徳鎮窯系、139・141・143は漳州窯系、142は中国南方系の窯の製品と思われる。143の赤絵鉢は、二次被熱を受けたようで、呉須・赤絵ともに変色している。144の華南三彩魚形水滴の腹部には孔が１つある。瓦器には火鉢（145）がある。焼締陶器には、丹波擂鉢（147・148）、信楽擂鉢（149）がある。丹波擂鉢は単線の擂り目、信楽擂鉢の櫛目単位は６本を施す。時期は11Ｂ段階に属する。

土坑31出土土器（図18）　土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・磁器が出土した。土師器には皿S（150～152）・塩壷蓋（153）・塩壷（154）などがある。皿Sは口径10.8～11.3㎝、器高1.9～2.3㎝（150～152）。施釉陶器には、瀬戸美濃系の台付盤（155）・唐津仏花瓶（156）がある。磁器には、染付椀（157）・染付片口（158）・染付瓶（159）がある。時期は11Ｃ段階に属する。

土坑117出土土器（図18、図版22）　土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・磁器などが出土した。土師器には皿N（160～169）・皿Sb（170～172）・皿S（173～175）・塩壷蓋（176）・塩壷（177）・鉢（178・179）などがある。皿Nには口径5.2～5.8㎝、器高1.1～1.3㎝（160～168）と口径6.4㎝、器高1.2㎝（169）の２群がある。皿Sbは口径8.9～9.2㎝、器高1.8～2.0㎝（170～172）、皿Sは口径10.2～10.5㎝、器高1.9～2.2㎝（173～175）である。178の鉢は二次被熱を受け、体部外面は剥離が著しい。体部上半には有機質と粘土の混ぜ土のようなものが付着する。内面には全面に煤が付着する。施釉陶器には、肥前系の銅緑釉鉢（180）がある。内面には銅緑釉、外面には灰釉を施す。底部内面は蛇の目釉剥ぎされるが、釉だけでなく素地も削り取られている。磁器には白磁小杯（181）・青磁蓋（182）・染付椀（183）・染付皿（184）がある。181の白磁小杯には貫入が細かく入る。182の青磁蓋の外面は施釉されるが、内面は無釉である。184の染付皿には口縁端部にのみ鉄釉が施釉される。体部から口縁部にかけては捻輪状に仕上げる。時期は12Ａ段階に属す

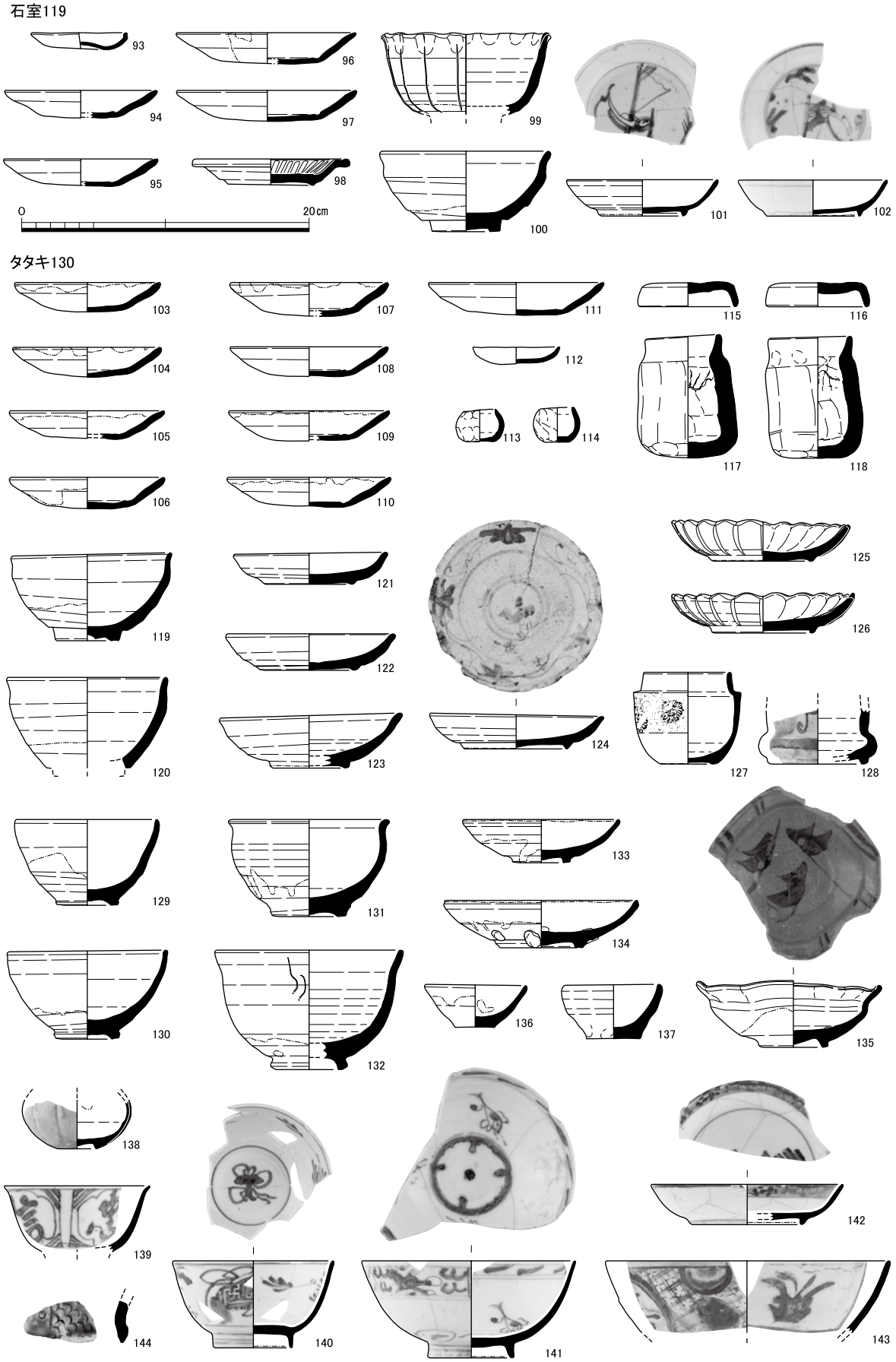


図16　石室119出土土器実測図、タタキ130出土土器実測図１（１：４）

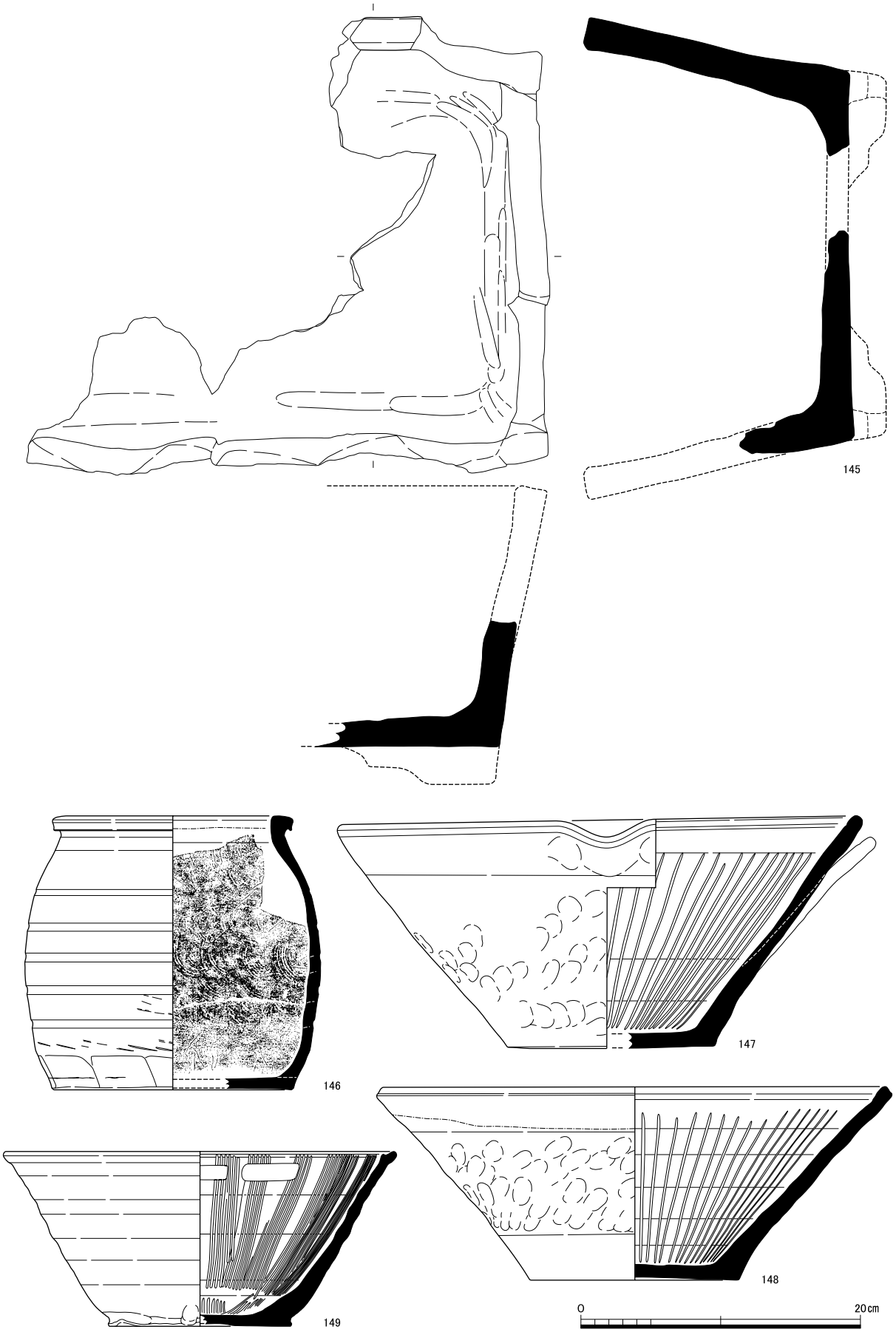


図17　タタキ130出土土器実測図２（１：４）

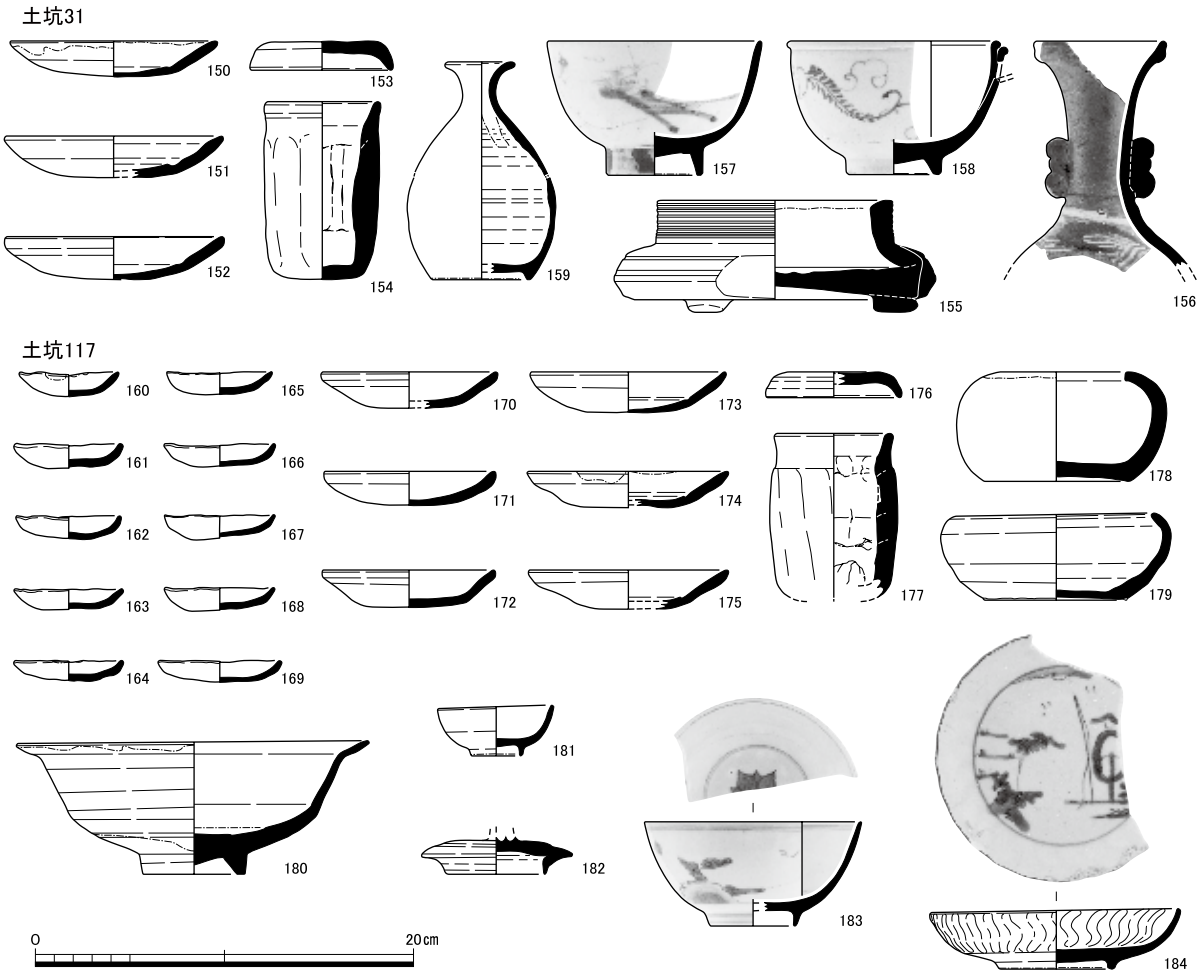


図18　土坑31・117出土土器実測図（１：４）

るが、古い様相を示す。

土坑15出土土器（図19、図版22・23）　土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・磁器などが出土した。土師器には皿Ｎ（185～190）・皿Ｓ（191～200）などがある。皿Ｎは口径5.1～6.0㎝、器高1.2～1.4㎝（185～190）。皿Ｓは口径9.8～10.3㎝、器高1.7～2.1㎝（191～199）と口径11.8㎝、器高2.5㎝（200）の２群がある。施釉陶器には、瀬戸美濃系の小壷（201）・皿（202）がある。201の小壷は底部以外に鉄釉が施される。底部外面には順糸切り痕（右回転）が残る。唐津産には刷毛目椀（203～205）・三島手椀（206）・絵唐津皿（207）がある。205の刷毛目椀の底部内面は蛇の目釉剥ぎが施される。207の絵唐津皿は灰釉で、鉄絵で描かれる。軟質施釉陶には、灯明皿（208）・灯火具（209）・蓋（210）がある。209の灯火具には全面に鉄釉が施され、底部外面には順糸切り痕が残る。

211～233は茶入れである。接合前の総破片数は122点であった。図化していないものには口縁部の破片が７点・底部の破片が２点・体部の破片が９点ある。図化したものも含めると少なく見積もると18点、多く見積もると20点以上の茶入れが出土したことになる。ただし、土坑の北半は試掘坑によって撹乱されていたため、さらに多くの茶入れが廃棄されていた可能性も考慮する必要がある。形態には様々なものがあり、体部から口縁部にかけて肩が張るもの（211～219・225）・

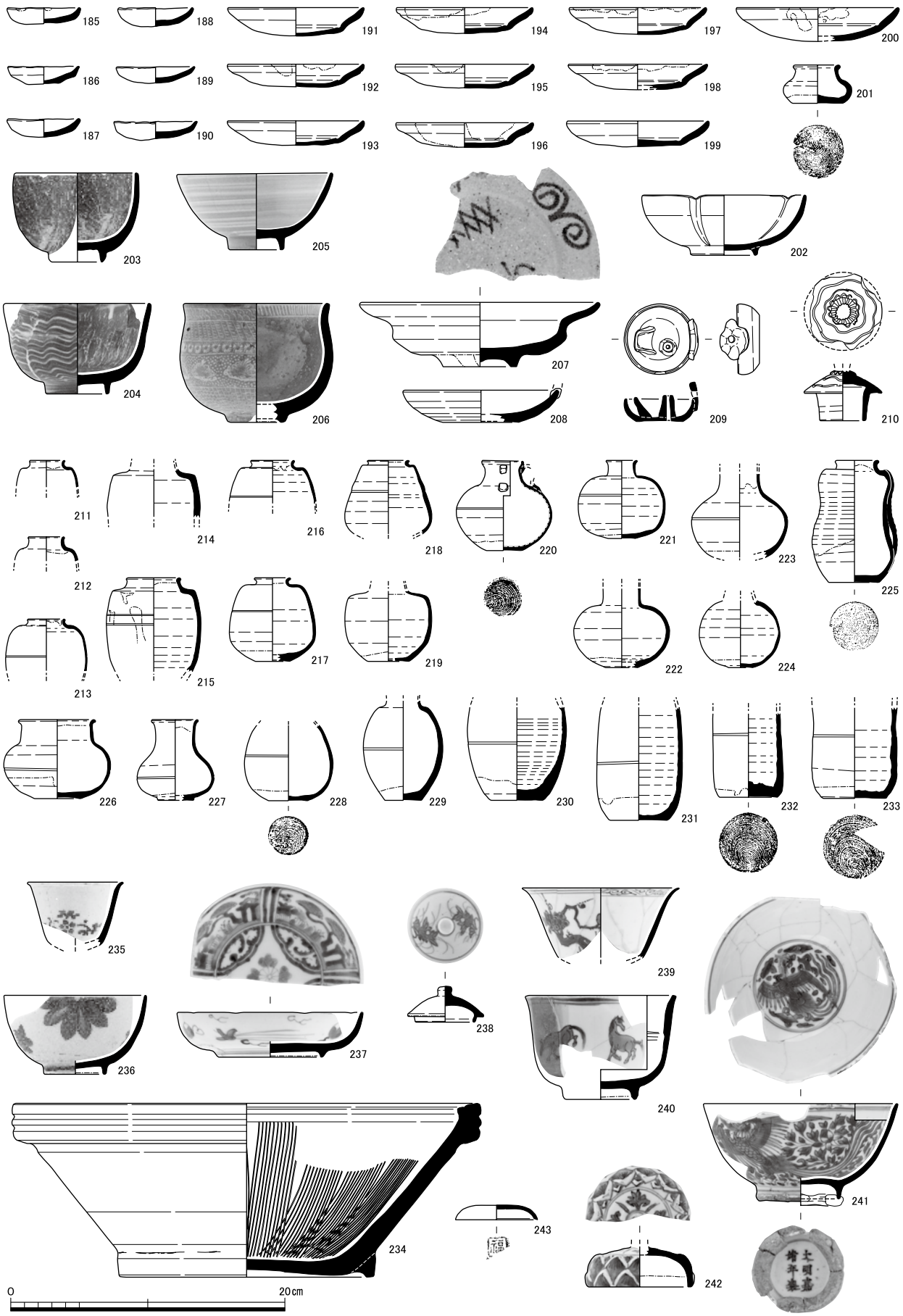


図19　土坑15出土土器実測図（1：4）

肩が丸みをおびるもの（220～224・226）・ナデ肩状のもの（227）などがある。220には１箇所に把手がつく。227はいわゆる鶴首。225はいわゆる胴〆のようで体部中央部が１箇所窪んでいる。底部糸切り痕が残るものは全て順糸切りである。焼締陶器には堺・明石系の擂鉢（234）がある。櫛目単位は12本。擂り目は密。底部内面には放射状に擂り目を施す。底部外面にはハの字状の火襷が４箇所にみられる。磁器には、染付椀（235・236）・皿（237）・蓋（238）がある。輸入陶磁器には、青花椀（239～241）・青花蓋（242）・華南三彩蓋（243）がある。241の青花椀は二次的に被熱を受けたようで、口縁部の一部が歪んでいる。口縁端部に砂が付着し、わずかに鉄釉がみられるところもある。また、底部内面には目痕が３点、高台にはトチンが残る。時期は12Ａ段階に属する。

土坑18出土土器（図20、図版23）　土師器・施釉陶器・焼締陶器・磁器・土製品・砥石・ガラス製品などが出土した。土師器には皿Ｓ（244～249）・鉢（250）がある。皿Ｓは口径10.3～10.8

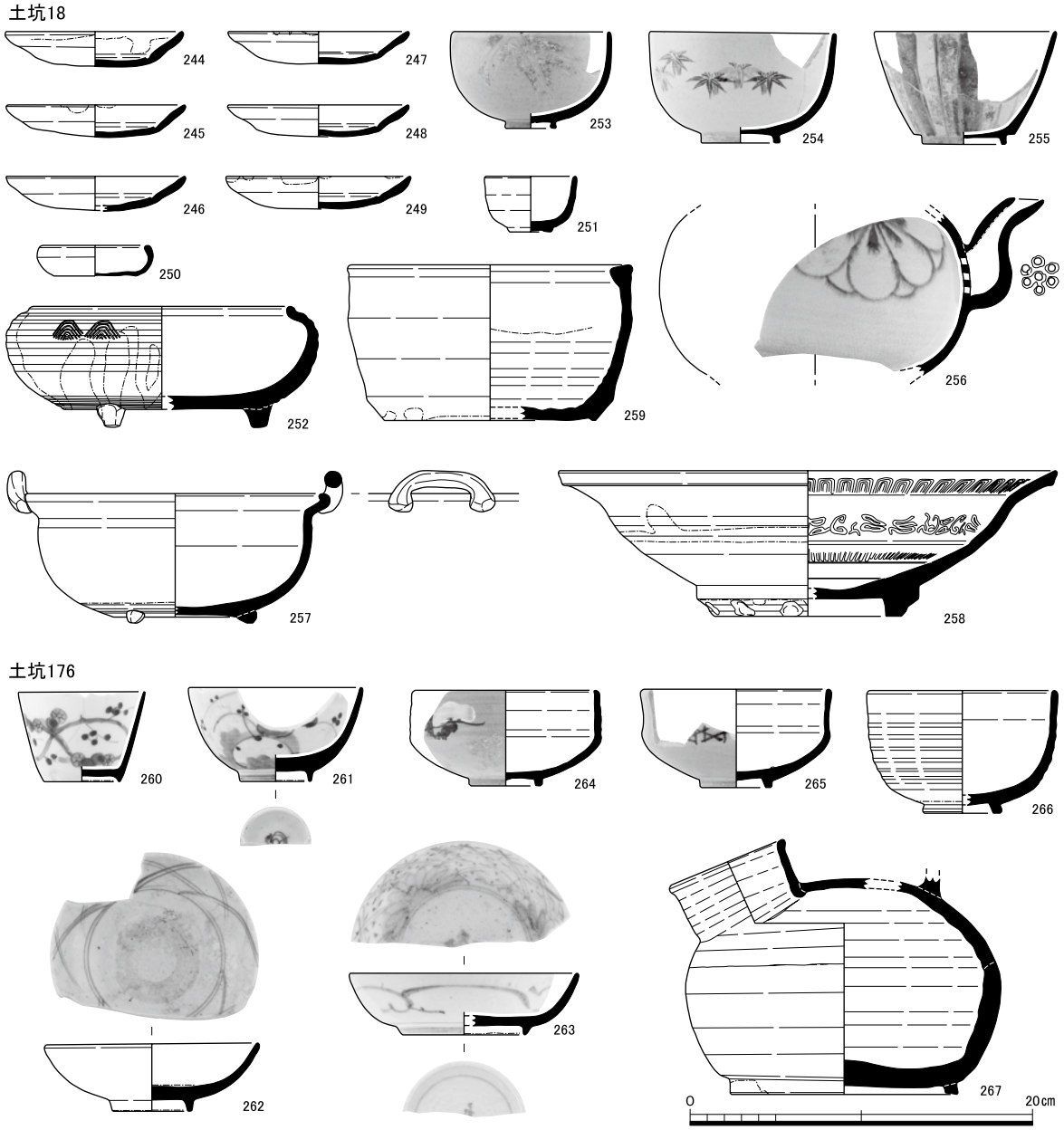


図20　土坑18・176出土土器実測図（１：４）

cm、器高1.9～2.1cm（244～249）である。施釉陶器には、瀬戸美濃系の小杯（251）・鉢（252）、京・信楽系の椀（253～255）・急須（256）・鍋（257）・鉢（258）、唐津鉢（259）がある。この他細片のため、図示していないが茶入れも出土している。259の唐津鉢の底部内面から体部上半には灰釉、体部下半から高台際までは鉄釉を施す。底部内面には、離れ砂が面的に付着する。時期は12Ｂ段階に属する。

土坑176出土土器（図20）　土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・磁器などが出土した。土師器には皿・塩壷蓋・塩壷があるが、いずれも細片のため図化できない。磁器には、肥前系の染付椀（260・261）、染付皿（262・263）がある。施釉陶器には、京・信楽系の椀（264～266）や瀬戸美濃系の溲瓶（267）がある。高台内以外には鉄釉が施される。口縁端部はやや肥厚し、体部上部には紐状把手が付くが、大部分を欠損する。底部は削出しによって、浅い輪高台状を呈する。時期は13Ａ段階に属する。

（３）鍛冶関連遺物（図21、図版24、付表２）

フイゴ羽口・鉄滓がある。江戸時代のタタキ130下層土坑からまとまって出土した。井戸・土坑・ピットなどからも出土したが、埋土に数点混じる程度で、まとまって出土した遺構はタタキ130を除くとみられない。そのため、本報告ではタタキ130下層土坑出土遺物を取り上げる。

フイゴ羽口（鍛１・２）は２点出土した。鍛１は残存長8.3cm、孔径2.1～2.2cm、外径6.4～6.6cm、厚さ２cm程度、重量351ｇである。先端には、鉄滓と炉壁と考えられるスサ混じり粘土が付着する。孔内面は赤く変色しているが、煤の付着はみられない。鍛２は残存長7.2cm、孔径2.2～2.5cm、外径6.6～7.0cm、厚さ2.0～2.5cm、重量546ｇである。先端には、鉄滓と炉壁と考えられるスサ混じり粘土・熔解した炉壁が付着する。孔内面は赤く変色しているが、煤の付着はみられない。どちらも、胎土には直径0.5cmまでの礫を多く含む。孔内面には不規則な皺が全面にみられ、制作時の痕跡と考えられる。

鉄滓（鍛３～９）には、椀形滓・流出滓がある。総計78点・12574ｇが出土し、椀形滓が43点・10450ｇ、流出滓が35点・2124ｇと椀形滓が８割程度を占める。椀形滓は重量から①125ｇ以下・②126～215ｇ・③216～310ｇ・④311～570ｇ・⑤571ｇ以上の５つに分けられる。それぞれの代表的なものを７点図示し、掲載する。流出滓は最も重いもので240ｇと椀形滓に比べ軽い。なお、椀形滓・流出滓ともに理化学的分析は行っていない。

（４）金属製品（図22・23、図版24）

金属製品　金属製品には鉄釘・鋏・小刀・刀子・棒状鉄製品・キセル・刀装具などがある。

金１は鉄製の小刀である。刃部の大部分を欠損する。残存長12.3cm、刃部幅1.4cm、柄幅1.5cmである。柄部の片側のみに象嵌を施す。象嵌の一部は欠損する。象嵌には真鍮を用い、文様は二重の方形区画の内側に「∞」字を連続させる。方形区画の歪みや「∞」字の規模が不揃いで、やや粗い造りのようにみえる。タタキ130下層土坑から出土した。

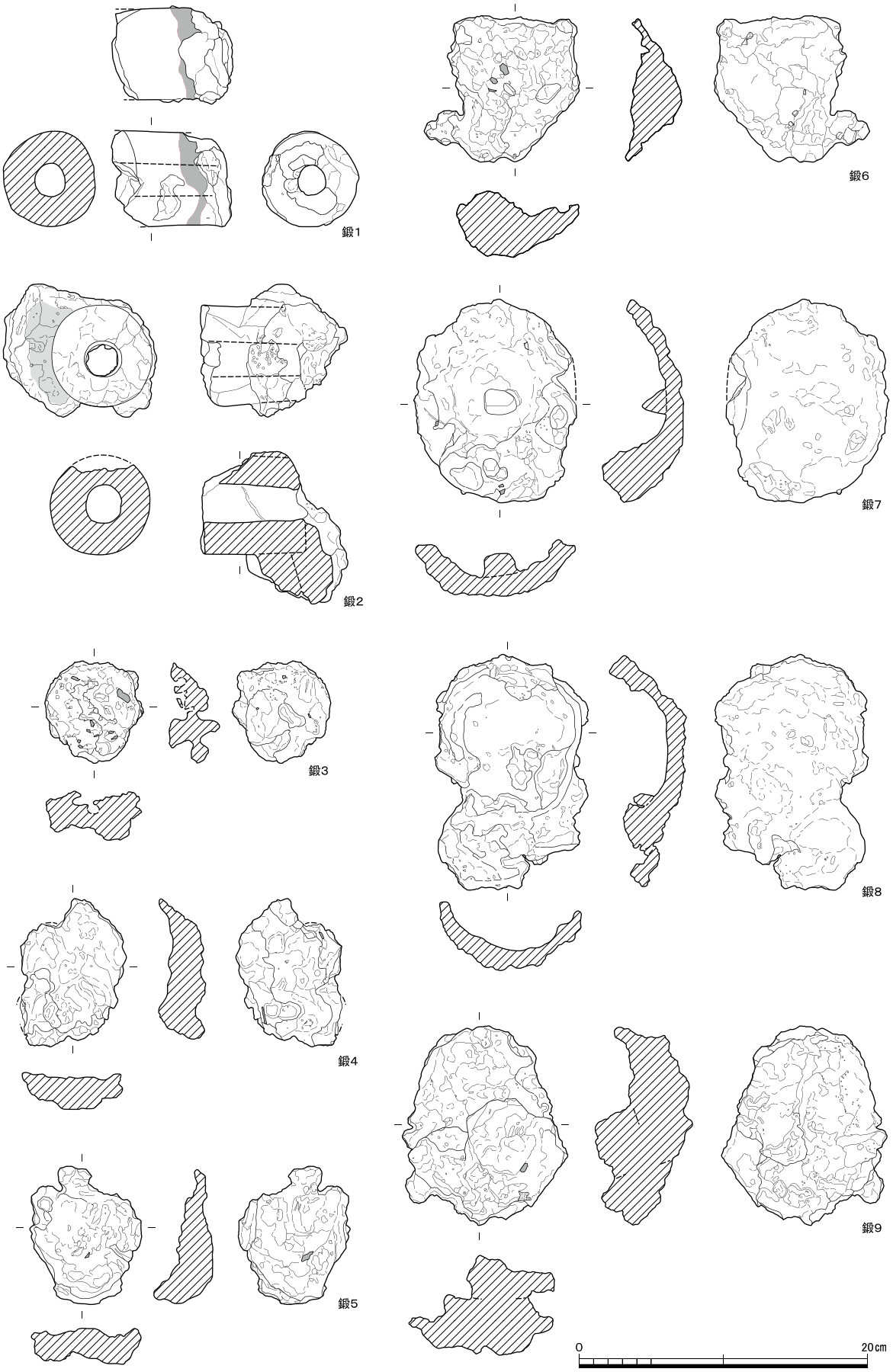


図21　鍛冶関連遺物実測図（1：4）

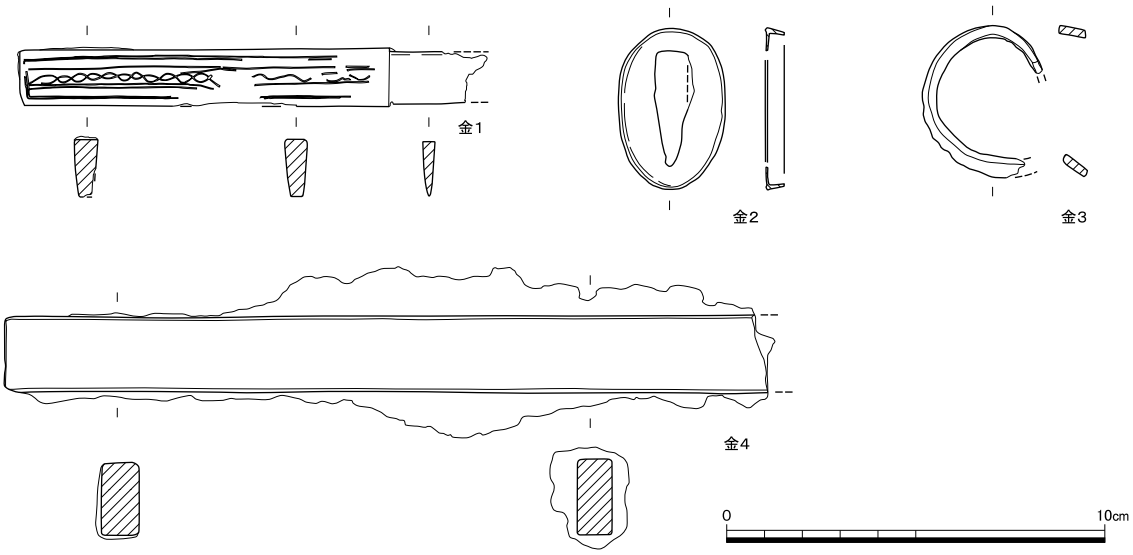


図22　金属製品実測図（１：２）

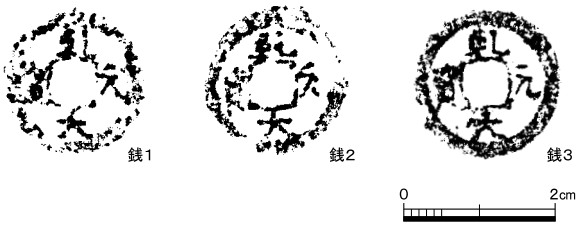


図23　銭貨拓影（１：１）

金２は銅製の鯉口金具である。ほぼ完形。長軸4.3㎝、短軸2.8㎝である。厚さは、0.5～1.0㎝と非常に薄い。タタキ130下層土坑から出土した。

金３は銅製の責金具である。一部欠損し、歪んでいる。本来の平面形は倒卵形に復元できる。長軸4.0㎝、短軸3.2㎝、厚さは0.8㎝である。タタキ130下層土坑から出土した。

金４は鉄製の棒状品である。片側の端部を欠損する。長軸残存長20.4㎝、短軸2.0㎝、厚さ0.9㎝重量約230ｇである。表面の片側には長軸に対してやや斜向する有機質が多く付着するが、本製品に伴うものではないと思われる。金４の性格については全体形が不明なため、欠損部分に刃部が付く工具ないしは鍛冶具の可能性も考えられるが、形態や厚み、鍛冶関連遺物が多く共伴していることなどから鉄素材の可能性を考慮しておきたい。タタキ130下層土坑から出土した。

銭貨　銭１～３は乾元大寳である。皇朝十二銭の12番目の鋳造で天徳二年（958）初鋳である。いずれも溝388上層から出土した。

（５）石製品（図24）

水晶・砥石・硯などがある。

石１は水晶である。残存長3.3㎝、幅1.8㎝、厚さ1.4㎝、重量10gである。断面形は六角形、先端は六角錐状を呈する。表面には長軸方向に直交する筋が多数みられ、加工時の痕跡と思われる。路２路盤から出土した。細片のため図示していないが、路２路盤からは他に２点水晶片が出土しており、うち１点には平坦な加工面がみられ、もう一方は加工面がみられず破面のみが観察できる。

石２～６は砥石である。いずれもタタキ130下層土坑から出土したものを抽出した。石２は長さ8.0㎝、幅2.0㎝、厚さ0.7㎝である。中央部分が窪み、そこに長軸方向と平行した沈線が数条ある。

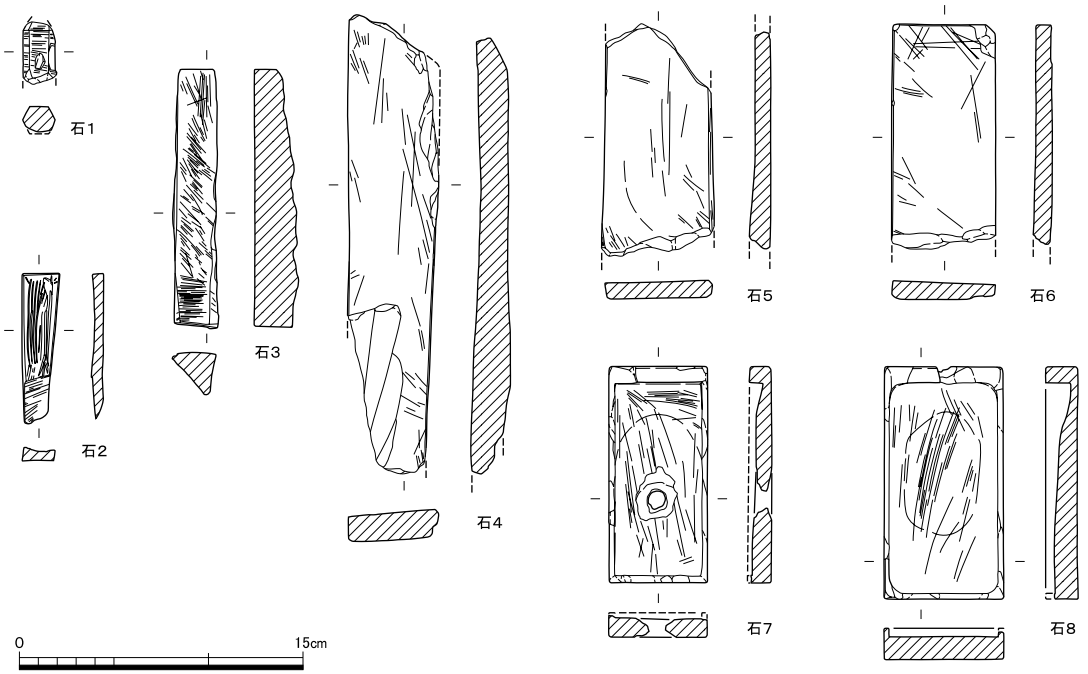


図24　石製品実測図（１：４）

石３は長さ13.7㎝、幅2.4㎝、厚さ2.3㎝である。断面形は逆三角形を呈する。上面には長軸に斜交する擦痕みられる。それ以外の二辺には製作時の加工痕がある。石４は長さ24.3㎝、幅4.8㎝、厚さ2.0㎝である。扁平な石材を用いるが大型である。上面はわずかに窪み、使用時の擦痕がみられる。石５は残存長12.3㎝、幅6.0㎝、厚さ1.1㎝である。扁平な石材を用いる。上面はわずかに窪み、長軸と平行の擦痕がみられる。石６は残存長11.9㎝、幅5.5㎝、厚さ1.0㎝である。

石７・８は硯である。ともに長方形を呈する。石７は長さ11.5㎝、幅5.3㎝、厚さ1.2㎝である。中央部には直径１㎝程度の孔が一つあり、硯以外の用途に転用しようとしたと考えられる。タタキ130下層土坑出土。石８は長さ12.3㎝、幅6.4㎝、厚さ1.7㎝である。土坑176出土。

（６）ガラス製品（図25、図版24）

ガラス１は土坑18から出土した。小片のため全体形は不明だが、器類と考えられる。表面の９割以上が白色物質に覆われる。本来は薄い紫色がかった透明であったとみられる。厚さは0.5～1.5㎝と非常に薄い。体部は輪花状に仕上げる。

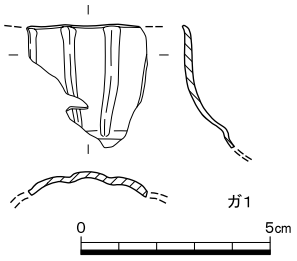
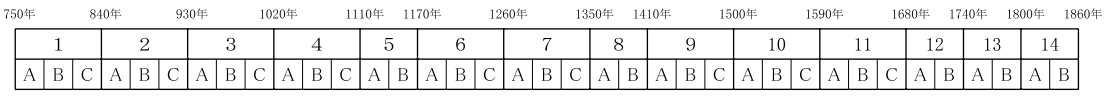


図25　ガラス製品実測図（１：２）

註

１）　平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年



５．まとめ

今回の調査では、富小路とその東西両側の平安京左京四条四坊十二・十三町のそれぞれの東・西端部の調査を行った。富小路は、路面・東西両側溝とその全体の様相を把握することができ、その変遷を明らかにすることができた。以下では、その成果について各時期の遺構変遷をまとめることとする。

平安時代中期中葉（第４－２・４－１面）には、路４（富小路）が整備される。路４の路面・路盤構築土からは、築造年代を判断できる遺物が出土していないため、整備され始めた時期を提示することが難しいが、東西両側溝である溝337・388が10世紀末から11世紀初頭には埋没することから、これに近い時期に整備されたものと考えられる。路面には時期差がみられ、当初の東側溝である溝388を埋めて、路面が東側に0.3～0.4ｍ拡張される。この東側に新たな東側溝として溝338が掘削される。この際に、路面の嵩上げは行われず、平面的な拡幅のみが行われている。また、東西両側溝の溝337・338の規模は、幅2.0～2.4ｍ、深さ0.5～0.9ｍと大規模である点が特徴で、底面も凹凸としていることなどから一定水量が流れていたことを窺わせる。西側溝は、平安京条坊復元モデルのほぼ推定位置で検出しているが、『延喜式』の規定よりも規模が大きく、築地側に広がっている。一方、東側溝は、溝の芯々間で考えると、推定ラインより1.5～1.6ｍほど西側に位置している。つまり、この地点の富小路は10世紀に施工された当初から延喜式の規定より幅狭く施工されていたと考えることができる。この時期は、これまでの発掘調査成果や『池亭記』などの史料などから平安京の右京域が衰退していく中で、居住域が左京の特に四条以北に集中するようになると考えられており、こういった背景のもとに整備が進められたとみることもできよう。ただし、本調査では、宅地内の様相は不明瞭であるため、路の整備と宅地の利用が同時期かつ面的に行われたかについては、今後の周辺調査成果の蓄積が必要になる。

平安時代中期後葉（第３面）には、路３が整備される。路４の路面幅をほぼ踏襲するが、側溝の規模が縮小される。側溝の幅は、その両肩部が残存している溝236をみると0.5～１ｍ程度、深さ0.1～0.2ｍになる。路の東西両側には南北方向の塀１・２が位置し、西側の塀１は築地芯推定ラインから１ｍ東側に位置する。一方、東側は推定ラインから約２ｍ西側に位置する。路４の時期と同様に、十三町の宅地境が路側に広がっていたことがわかる。十二町・十三町ともに路と宅地境に塀が位置しており、宅地として利用されていたことがわかる。また、路３南東部で門１を検出しており、十三町が宅地として利用されていたことを明瞭に示す。

平安時代後期（第２－２面）には、路２が整備される。路２になると、その路面幅が拡幅されるが、西端は路３や４とほぼ変わらず、東側が広がる。構築状況をみてみると、路盤は0.15～0.2ｍとやや厚く、比較的大ぶりの石材や硬質の土器類を構築材として使用する。加えて路面には、路３・４より一回り大きい石材を用いるなど、これまでと比べてやや粗雑な作りになる。路の維持・管理などに変化があった結果であろうか。側溝は、鎌倉時代初頭には埋没する溝174・199と鎌倉時代前半（第２－１面）には埋没する溝126・149に分けることができる。溝174・199の時期に溝

間の幅が最も大きく、路面幅が広くなる。その後、溝126・149の時期には再度、規模が縮小される。溝126・149とは埋没時期が異なるものの、十二町内には、その内溝と考えられる南北方向の溝172が位置する。その規模は、検出幅が2.1～2.4ｍ・深さ0.5ｍ程度と比較的大きい。この時期に宅地の整備が行われたことが推測され、内溝が大規模であることから宅地規模も一定規模を有していたと思われる。

室町時代（第１面）には、路１が整備される。路２から路面幅が縮小され、路３・４とほぼ同規模程度になり、東西両側溝にあたる溝112・121も規模が小さくなる。路盤は0.1～0.12ｍとやや厚く、比較的大ぶりの直径20㎝までの礫を多量に含むが、土器類の混入は少量で、路２とは構築材の選定ないしは入手状況が異なっていたようである。路面には路２と同規模程度の礫を用いており、粗雑な作りになる。十三町の西端には小規模な地下式礎石をもつ柱穴が散発的にみられ、復元することは難しいが区画施設ないしは路に面した建物と考えることもできる。

江戸時代になると様相が変わって、路１の路面上に石室や土坑といった宅地としての土地利用を示す遺構が“存在する”または“成立する”ようになる。いわゆる天正地割によって約10ｍ西側に麩屋町通が新たに開かれ、富小路は街路から街区へと土地利用が変質する。本調査では、16世紀から17世紀初頭の遺構・遺物も検出されていないため、厳密には天正年間に天正地割が行われたとは今回の調査からは言いきれないが、一時期土地利用が低調な時期があったことは想定できる。江戸時代の遺構面で調査を行えていないため断片的な遺構の年代からにはなるが、街区として活発な土地利用がみられるようになる時期は、17世紀第２四半期以降と考えられる。その後、いわゆる天正地割が実施された時期と本調査成果の時期には若干の開きがあることから、近世都市京都の整備過程の実態が反映されているとも考えることができる。また、17世紀前半のタタキ130からはまとまって鍛冶関連遺物が出土している。出土遺構と史料の時期はやや異なるものの、寛文５年（1665）刊行の『京雀』などの史料から調査地周辺に鍛冶屋町の町名があり、関連する可能性がある。近世京都の町中での手工業生産の様相を考える材料にはなり得る。

以上のように、平安時代から室町時代までの富小路の変遷と江戸時代以降の土地利用の変質について明らかにすることができた。また、これまでにも平安京内では街路の調査が多く行われてきたが、平安京の街路が現況道路まで踏襲され続けていることが多い。そのため、発掘調査では路の部分的な調査に留まることが圧倒的に多い。このような調査状況のなかで、今回は路全体の様相を把握することができる稀有な調査例にはなった。一方で、路の構造や構築材といった諸要素を把握することができた。今後、他の発掘調査例との比較検討を行う必要がある。また、近世鍛冶関連遺物については、十分に比較検討できる資料の提示がこれまでないのが現状であり、近世京都における金属器生産の実態解明のためには、意識的な調査と資料の蓄積が必要である。

付章　動物遺存体について

丸山真史（東海大学）・関　晃史（京都市埋蔵文化財研究所）

今回の調査では、19点の動物遺存体が出土している。同定した動物種は、ウマ（*Equus caballus*）、ウシ（*Bos Taurus*）、シカ（*Cervus nippon*）の３種である。これらは全て哺乳類であり、１点は骨角器あるいはその未製品である。また、動物遺存体のうち１点は江戸時代前期前半の石室から、その他は平安時代中期あるいは後期の道路遺構から出土したものである。以下、種類別の特徴を記載する。

ウマ　路２路盤から遊離歯（上顎？I1、左？）〔№３〕、上顎骨（左右）が１点ずつ、計２点が出土している。左上顎骨〔№１〕はP2からM2まで植立しており、右上顎骨〔№２〕はP3からM3まで顎骨は腐食し遊離している。これらの歯冠高の計測値から８歳前後と推定され、前臼歯列長から日本在来の御崎馬や木曽馬といった中型馬に相当する（表２）。左P2の前端はエナメル質が部分的に露出しており、ハミが当たった痕跡の可能性もある。

路３路盤からは指骨（基節骨）〔№６〕、中足骨（右）〔№７〕が１点ずつ、計２点が出土している。中足骨の最大長（GL）234㎜、近位端最大幅（Bp）40.1㎜、遠位端最大幅（Bd）39.1㎜を測り、体高115～120㎝と推定される[1)]。また、第２中足骨が癒合している。

路３路面から遊離歯（上顎P3/P4、上顎M3）〔№４・５〕が２点出土しており、それぞれ歯冠高35.3㎜、38.86㎜を測り、10～11歳、９～10歳の壮齢馬と推定される。

図１　動物遺存体（№１～７ ウマ、№８～11 ウシ、№12～14 シカ）

ウシ　石室117から脛骨（左）〔№9〕が１点出土しており、遠位端最大幅（Bd）約61㎜を測り、体高115～120㎜と推定される[2)]。

路３路面から遊離歯（下顎M3、左）〔№8〕、中足骨（右）〔№11〕が１点ずつ、計２点が出土している。下顎M3の咬耗は一定進行しているが、若齢個体と推定される。

路４路面から上腕骨（左）〔№10〕が１点出土している。

ウマ／ウシ　細片化しており、ウマとウシの区別がつかないものである。

路３路盤から橈骨？２点、四肢骨片１点、計３点が出土している。

路３路面から四肢骨片２点が出土している。

シカ　路３路面から頭蓋骨（右１左１）〔№13・14〕２点が出土している。いずれも角座があり、角自体は細く、雄の若齢個体と推定される。これらは同一個体の可能性が高い。

また、路２路盤から枝角〔№12〕が出土している。両端は鋸で切断されており、海綿質は抜かれ、表面には部分的に自然の顆粒状の凹凸が残る。骨角器の未製品と考えられる。

表１　動物遺存体一覧表

遺構	年代	№	大分類	小分類	部位	左右	備　考
石室117	江戸時代前期前半	9	哺乳綱	ウシ	脛骨	左	Bd60.9㎜+
路2路盤	平安時代後期	1・2	哺乳綱	ウマ	上顎骨	左右	
		3	哺乳綱	ウマ	上顎？I1	左？	若齢～壮齢
		12	哺乳綱	シカ	枝角	―	骨角器
路3路面	平安時代中期	4	哺乳綱	ウマ	上顎P3/P4	右	歯冠長24.7㎜, 幅24.2㎜, 高35.3㎜
		5	哺乳綱	ウマ	上顎M3	左	歯冠長25.1㎜, 幅19.9㎜, 高38.9㎜以上
		8	哺乳綱	ウシ	下顎M3	左	
		11	哺乳綱	ウシ	中足骨	右	
		―	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨	―	
		―	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨	―	
		13	哺乳綱	シカ	頭蓋骨	右	
		14	哺乳綱	シカ	頭蓋骨	左	
路3路盤	平安時代中期	6	哺乳綱	ウマ	指骨	―	Bd37.3㎜
		7	哺乳綱	ウマ	第3中足骨	右	GL234㎜, Bp40.1㎜+, Bd39.2㎜+, SD24.5㎜
		―	哺乳綱	ウマ/ウシ	橈骨？	右	
		―	哺乳綱	ウマ/ウシ	橈骨？	―	
		―	哺乳綱	ウマ/ウシ	四肢骨	―	
路4路面	平安時代中期	10	哺乳綱	ウシ	上腕骨	左	

表２　ウマ上顎骨〔№１・２〕臼歯計測値（㎜）

		P2	P3	P4	M1	M2	M3
左上顎骨〔№1〕	歯冠長	39.0	31.0	29.8	24.6	25.6	×
	歯冠幅	24.7	28.0	28.9	27.4	26.2	
	歯冠高	32.5	―	―	―	46.2	
	臼歯列長	89.9			×		
右上顎骨〔№2〕	歯冠長	×	30.0	29.0	24.9	25.5	26.0
	歯冠幅		27.8	28.2	27.6	25.5	23.0
	歯冠高		45.7	47.1	37.6	47.1	50.4

以上のように当調査では、平安時代中期・後期の路面および路盤から動物骨が出土している。これまでに平安京左京六条三坊五町の楊梅小路でウマ、ウシ、イヌ、鹿角、法住寺殿跡で法性寺大路と観音寺大路に先行する道路の交差点北東の道路面でウシが出土している。これらは祭祀関連や近隣ゴミの可能性があり、いずれにしても京内外の道路で獣骨が散乱する光景がみられた[3)]。当調査は、平安京内の道路面からの動物骨出土の３例目となる。動物骨を意図的に路面ないし路盤に含めたのか、路面形成時に混入したのか判然としないが、明確な祭祀関連遺物が共伴せず、近隣のゴミである可能性を考えておきたい。

註

１）　体高の推定は、西中川駿編1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告　を基に行った。

２）　註１）に同じ

３）　丸山真史2017「平安京における動物利用」『条里制・古代都市研究』第33号　条里制・古代都市研究会　pp.17-27

付表１　土器一覧表

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土色調	産地	備　　考
1	土師器	杯	遺物包含層	16.8	(3.2)		5Y6/6橙		
2	土師器	皿	遺物包含層	15.4	2.3		2.5YR7/6橙		
3	土師器	皿	遺物包含層	20.1	(2.6)		2.5YR6/8橙		
4	須恵器	杯蓋	遺物包含層	14.6	3.7		N6/0灰		
5	須恵器	杯身	遺物包含層	10.0	(2.7)		N4/0灰		
6	灰釉陶器	椀	溝388		(3.9)	8.4	N7/0灰白		底部外面に「大」墨書有
7	灰釉陶器	椀	溝338	14.1	6.7	6.4	5Y8/1灰白		
8	土師器	皿A	溝334	10.7	2.0		10YR8/2灰白		
9	土師器	皿N	溝334	15.6	(3.0)		7.5YR7/3にぶい橙		
10	灰釉陶器	椀	溝334		(3.0)	6.5	N7/0灰白		
11	灰釉陶器	椀	溝334		(2.8)	6.6	N7/0灰白		
12	土師器	皿A	溝236	10.4	1.5		10YR6/2灰黄褐		
13	土師器	皿N	溝236	13.8	2.4		10YR6/2灰黄褐		
14	土師器	皿A	ピット462	10.2	1.7		7.5YR4/3にぶい橙		
15	灰釉陶器	椀	ピット365		(1.5)	7.2	N8/0灰白		底部内面に赤色顔料付着
16	灰釉陶器	椀	ピット374		(2.8)	7.8	N7/0灰白		底部内面に赤色顔料付着
17	土師器	皿Ac	溝172	7.9	1.2		10YR7/2にぶい黄橙		
18	土師器	皿Ac	溝172	8.2	1.2		10YR7/2にぶい黄橙		
19	土師器	皿Ac	溝172	8.5	1.4		10YR7/3にぶい黄橙		
20	土師器	皿N	溝172	8.9	1.7		10YR8/2灰白		
21	土師器	皿N	溝172	9.0	1.5		10YR7/2にぶい黄橙		
22	土師器	皿N	溝172	9.3	1.7		10YR7/3にぶい黄橙		
23	土師器	皿N	溝172	13.6	3.5		10YR8/2灰白		
24	土師器	皿N	溝172	14.1	2.9		7.5YR8/3浅黄橙		
25	土師器	皿N	溝172	14.3	2.9		7.5YR8/3浅黄橙		
26	土師器	皿N	溝172	14.4	3.2		10YR7/2にぶい黄橙		
27	土師器	皿N	溝174	8.1	1.3		10YR7/2にぶい黄橙		
28	土師器	皿N	溝174	8.2	1.5		7.5YR7/4にぶい橙		
29	土師器	皿N	溝174	8.2	1.5		10YR7/3にぶい黄橙		
30	土師器	皿N	溝174	8.3	1.5		7.5YR7/4にぶい橙		
31	土師器	皿N	溝174	8.3	1.5		10YR7/3にぶい黄橙		
32	土師器	皿N	溝174	8.4	1.3		7.5YR7/4にぶい橙		
33	土師器	皿N	溝174	8.4	1.4		7.5YR7/4にぶい橙		
34	土師器	皿N	溝174	8.5	1.4		10YR7/3にぶい黄橙		
35	土師器	皿N	溝174	8.6	1.25		10YR7/3にぶい黄橙		
36	土師器	皿N	溝174	12.8	3.0		7.5YR7/4にぶい橙		
37	土師器	皿N	溝174	13.1	2.5		10YR7/4にぶい黄橙		
38	土師器	皿N	溝199	8.7	1.4		7.5YR7/4にぶい橙		
39	土師器	皿N	溝199	8.7	1.4		7.5YR7/4にぶい橙		
40	土師器	皿N	溝199	8.7	1.6		7.5YR7/4にぶい橙		
41	土師器	皿N	土坑205	7.6	1.7		5YR7/4にぶい橙		
42	土師器	皿N	土坑205	7.9	1.7		5YR7/4にぶい橙		
43	土師器	皿N	土坑205	8.0	1.5		5YR7/4にぶい橙		
44	土師器	皿N	土坑205	8.0	1.8		5YR7/4にぶい橙		
45	土師器	皿N	土坑205	10.5	2.4		5YR7/4にぶい橙		
46	土師器	皿N	土坑205	10.6	2.3		7.5YR7/3にぶい橙		
47	土師器	皿N	土坑205	10.6	2.2		5YR7/4にぶい橙		
48	土師器	皿N	土坑205	10.8	2.4		5YR7/4にぶい橙		
49	土師器	皿N	土坑205	11.4	2.3		5YR7/4にぶい橙		
50	土師器	皿N	土坑205	10.6	2.5		5YR7/4にぶい橙		
51	土師器	皿Sh	土坑205	6.7	1.85		10YR8/2灰白		
52	土師器	皿Sh	土坑205	6.6	1.85		10YR8/2灰白		
53	土師器	皿Sh	土坑205	6.7	1.8		10YR8/2灰白		
54	土師器	皿Sh	土坑205	6.8	1.8		10YR8/2灰白		
55	土師器	皿Sh	土坑205	6.8	2.0		10YR8/2灰白		
56	土師器	皿Sh	土坑205	6.4	2.0		10YR8/2灰白～ 10YR8/3浅黄橙		
57	土師器	皿Sh	土坑205	6.5	1.9		10YR8/2灰白		

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土色調	産地	備　　考
58	土師器	皿Sh	土坑205	6.6	1.8		10YR8/2灰白		
59	土師器	皿Sh	土坑205	6.9	2.0		10YR8/2灰白		
60	土師器	皿S	土坑205	11.4	2.7		10YR8/2灰白		
61	土師器	皿S	土坑205	11.6	3.1		10YR8/2灰白		
62	土師器	皿S	土坑94	11.2	2.8		7.5YR8/4浅黄橙		
63	土師器	皿S	土坑94	11.2	2.8		7.5YR8/4浅黄橙		
64	土師器	皿S	土坑94	11.7	2.6		7.5YR8/4浅黄橙		
65	土師器	皿S	土坑94	11.9	2.6		7.5YR8/4浅黄橙		
66	土師器	皿S	土坑94	14.5	3.0		7.5YR8/4浅黄橙		
67	土師器	皿S	土坑94	14.6	2.9		7.5YR8/4浅黄橙		
68	土師器	皿S	土坑94	14.8	2.9		7.5YR8/4浅黄橙		
69	瓦器	小杯	土坑94	6.4	1.9		N8/0灰白		
70	輸入陶器	天目椀	土坑94	11.0	(5.1)		10YR6/2灰黄褐	健窯	釉:7.5YR4/4褐～ 2.5YR3/2暗赤褐
71	土師器	皿N	土坑125	6.0	1.1		10YR7/2にぶい黄橙		
72	土師器	皿N	土坑125	6.7	1.4		10YR7/3にぶい黄橙		
73	土師器	皿Sb	土坑125	10.2	2.2		10YR8/3浅黄橙		底部中央に径3㎜の孔
74	土師器	皿S	土坑125	10.5	2.0		10YR8/2灰白		
75	土師器	皿S	土坑125	10.9	2.2		10YR8/3浅黄橙		
76	土師器	皿S	土坑125	11.0	2.2		7.5YR7/4にぶい橙		
77	土師器	皿S	土坑125	11.2	2.4		10YR8/3浅黄橙		
78	土師器	皿S	土坑125	11.3	2.1		10YR8/3浅黄橙		
79	土師器	皿S	土坑125	11.4	2.2		10YR7/3にぶい黄橙		
80	土師器	皿S	土坑125	11.4	2.3		10YR7/3にぶい黄橙		
81	土師器	皿S	土坑125	12.0	2.5		7.5YR7/4にぶい橙		
82	土師器	皿S	土坑125	12.5	2.1		10YR8/3浅黄橙		
83	土師器	皿S	土坑125	12.8	2.3		10YR8/2灰白		
84	土師器	片口鉢	土坑125	8.5	3.0		2.5Y7/3浅黄		
85	土師器	焙烙鍋	土坑125	30.6	(6.6)		7.5YR7/3にぶい橙		
86	土師器	塩壷蓋	土坑125	7.0	1.9		7.5YR7/4にぶい橙		
87	施釉陶器	椀	土坑125	6.2	5.3	4.0	2.5Y8/1灰白	瀬戸・美濃系	釉:2.5Y7/2灰黄
88	施釉陶器 織部	台付皿	土坑125	15.0	4.6	5.5		瀬戸・美濃系	釉:2.5Y8/3淡黄 文様a:緑　b:7.5YR4/4褐 c:7.5YR3/2黒褐
89	施釉陶器	椀	土坑125	10.2	6.3	4.1	5YR5/3にぶい赤褐	唐津	釉:7.5YR6/1灰
90	焼締陶器	鉢	土坑125	15.0	8.8	13.0	5YR3/2暗赤褐	丹波	
91	瓦器	火鉢	土坑125	15.2	5.7	15.0	N3/0暗灰		
92	瓦器	蓋	土坑125	25.7	(10.0)		N3/0暗灰		
93	土師器	皿N	石室119	6.6	1.2		10YR8/2灰白		
94	土師器	皿S	石室119	10.6	1.9		10YR8/2灰白		
95	土師器	皿S	石室119	10.7	1.9		10YR8/2灰白		
96	土師器	皿S	石室119	12.2	2.2		7.5YR8/4浅黄橙		
97	土師器	皿S	石室119	12.3	2.2		10YR8/3浅黄橙		
98	施釉陶器	皿	石室119	10.4	1.9	5.9	7.5Y8/1灰白	瀬戸・美濃系	釉:5Y7/3浅黄
99	施釉陶器	椀	石室119	11.4	(5.6)		2.5Y8/1灰白	瀬戸・美濃系	釉:5Y6/3オリーブ黄
100	施釉陶器	天目椀	石室119	11.5	5.6	3.3	2.5Y8/1灰白	瀬戸・美濃系	釉:10YR2/1黒～10YR4/4褐
101	輸入磁器 青花	皿	石室119	10.4	2.5	5.6	N8/0灰白	中国南方系	
102	輸入磁器 青花	皿	石室119	10.2	2.5	6.4	N8/0灰白	中国南方系	
103	土師器	皿Sb	タタキ130	10.0	2.1		7.5YR8/4浅黄橙		
104	土師器	皿S	タタキ130	10.2	2.1		7.5YR8/3浅黄橙		
105	土師器	皿S	タタキ130	10.7	2.0		7.5YR8/4浅黄橙		
106	土師器	皿S	タタキ130	10.7	2.2		7.5YR8/4浅黄橙		
107	土師器	皿S	タタキ130	10.9	2.4		7.5YR8/4浅黄橙		
108	土師器	皿S	タタキ130	11.0	2.1		7.5YR8/4浅黄橙		
109	土師器	皿S	タタキ130	11.1	2.1		7.5YR8/3浅黄橙		
110	土師器	皿S	タタキ130	11.3	2.1		7.5YR8/3浅黄橙		
111	土師器	皿S	タタキ130	12.1	2.3		7.5YR8/4浅黄橙		
112	土師器	皿N	タタキ130	6.0	1.2		7.5YR8/4浅黄橙		

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土色調	産地	備　　考
113	土師器	小壷	タタキ130	2.1	2.2	1.8	7.5YR8/1灰白		
114	土師器	小壷	タタキ130	2.2	2.4	1.6	10YR8/3浅黄橙		
115	土師器	塩壷蓋	タタキ130	6.6	1.7		7.5YR8/4浅黄橙		
116	土師器	塩壷蓋	タタキ130	6.8	1.7		7.5YR7/4にぶい橙		
117	土師器	塩壷	タタキ130	5.0	8.6		5YR7/6橙		
118	土師器	塩壷	タタキ130	5.6	8.5		5YR7/4にぶい橙		
119	施釉陶器	天目椀	タタキ130	11.0	6.1	4.3	2.5Y8/1灰白	瀬戸・美濃系	釉:5YR4/4にぶい赤褐
120	施釉陶器	天目椀	タタキ130	11.0	(6.3)		2.5Y8/3淡黄	瀬戸・美濃系	釉:7.5YR2/3極暗褐
121	施釉陶器	皿	タタキ130	10.5	2.2	5.9		瀬戸・美濃系	釉:5Y8/1灰白
122	施釉陶器	皿	タタキ130	11.5	2.6	6.2	2.5Y8/2灰白	瀬戸・美濃系	釉:2.5Y8/2灰白
123	施釉陶器	皿	タタキ130	12.5	3.8	5.0	10YR7/1灰白	瀬戸・美濃系	釉:10YR6/2灰黄褐
124	施釉陶器	皿	タタキ130	11.9	2.5	7.0	2.5Y8/2灰白	瀬戸・美濃系	釉:2.5Y8/2灰白
125	施釉陶器	皿	タタキ130	11.1	2.9	6.8	5Y8/1灰白	瀬戸・美濃系	釉:5Y8/1灰白
126	施釉陶器	皿	タタキ130	12.5	2.8	6.7	2.5Y8/2灰白	瀬戸・美濃系	釉:2.5Y7/2灰黄
127	施釉陶器	棗	タタキ130	5.9	6.4	3.6	2.5Y8/2灰白	瀬戸・美濃系	釉:2.5Y8/2灰白
128	施釉陶器 織部	向付	タタキ130	6.6	(3.8)		2.5Y8/2灰白	瀬戸・美濃系	釉:7.5Y6/2灰オリーブ、N7/0灰白、10YR3/1黒褐
129	施釉陶器	椀	タタキ130	9.7	6.0	3.2	5YR5/4にぶい赤褐	唐津	釉:10Y6/2オリーブ灰
130	施釉陶器	椀	タタキ130	10.9	6.2	3.4	10YR7/3にぶい黄橙	唐津	釉:7.5YR3/1黒褐
131	施釉陶器	椀	タタキ130	10.6	6.7	3.9	7.5YR7/4にぶい橙	唐津	釉:7.5YR5/2灰褐
132	施釉陶器	椀	タタキ130	12.6	8.3	4.6	7.5YR6/3にぶい褐	唐津	釉:7.5Y5/3灰オリーブ
133	施釉陶器	皿	タタキ130	10.7	3.0	3.0	2.5Y7/1灰白	唐津	釉:2.5Y5/2暗灰黄
134	施釉陶器	皿	タタキ130	13.4	3.3	5.7	10YR7/4にぶい黄橙	唐津	釉:5Y6/2灰オリーブ
135	施釉陶器	皿	タタキ130	12.4	4.7	4.0	7.5YR6/3にぶい褐	唐津	釉:10YR5/2灰黄褐
136	施釉陶器	小杯	タタキ130	6.9	3.0	2.7	10YR7/4にぶい黄橙	唐津	釉:7.5Y7/1灰白
137	施釉陶器	小杯	タタキ130	6.5	3.8	3.7	2.5Y7/2灰黄	唐津	釉:5Y6/2灰オリーブ
138	軟質施釉陶器	鉢	タタキ130		(3.4)	2.6	7.5YR7/4にぶい橙		釉外:明黄緑、緑(すじ状) 内:白
139	輸入磁器 青花	椀	タタキ130	10.0	(4.6)		N9/0白	漳州窯系	
140	輸入磁器 青花	椀	タタキ130	11.0	6.1	5.3	N9/0白	景徳鎮窯系	
141	輸入磁器 青花	椀	タタキ130	14.8	6.8	5.7	N9/0白	漳州窯系	
142	輸入磁器 青花	皿	タタキ130	13.3	2.8	7.6	N9/0白	中国南方系	
143	輸入 赤絵	鉢	タタキ130	19.8	(5.1)		N6/0灰	漳州窯系	釉:N8/0灰白、5Y4/1灰、2.5YR3/4暗赤褐
144	輸入陶器 華南三彩	水滴	タタキ130				2.5Y8/2灰白	中国	釉:緑　腹部に孔
145	瓦器	火鉢	タタキ130		21.4		N5/0灰		
146	施釉陶器	壷	タタキ130	14.4	19.6	17.0	7.5YR4/1褐灰	丹波	釉:10YR3/1黒褐
147	焼締陶器	擂鉢	タタキ130	36.4	16.7	14.5	7.5YR6/3にぶい橙	丹波	釉:5YR3/4暗赤
148	焼締陶器	擂鉢	タタキ130	35.9	13.8	14.8	10YR5/2灰黄褐	丹波	
149	焼締陶器	擂鉢	タタキ130	27.8	12.5	13.0	5YR5/3にぶい赤褐	信楽	
150	土師器	皿S	土坑31	10.8	1.9		7.5YR7/4にぶい橙		
151	土師器	皿S	土坑31	11.3	2.2		10YR5/1褐灰		
152	土師器	皿S	土坑31	11.3	2.3		7.5YR7/4にぶい橙		
153	土師器	塩壷蓋	土坑31	7.4	1.5		5YR6/6橙		
154	土師器	塩壷	土坑31	5.8	9.4		5YR6/6橙		
155	施釉陶器	台付盤	土坑31	12.4	5.9		2.5Y8/2灰白	瀬戸・美濃系	釉:2.5Y8/3淡黄
156	施釉陶器	仏花瓶	土坑31	6.7	(6.9)		2.5Y5/1黄灰	唐津	釉:5YR3/3暗褐、7.5Y5/3オリーブ灰、2.5Y8/2灰白
157	染付	椀	土坑31	11.2	7.0	4.8	5Y8/1灰白		釉:7.5GY8/1明緑、5YR3/3暗赤褐
158	染付	椀	土坑31	10.8	7.1	4.8	5Y8/1灰白		釉:7.5GY8/1明緑灰
159	染付	瓶	土坑31	3.4	11.5	5.2	N8/0灰白		復元図を入れておく
160	土師器	皿N	土坑117	5.2	1.3		7.5YR7/4にぶい橙		
161	土師器	皿N	土坑117	5.4	1.3		7.5YR8/4浅黄橙		
162	土師器	皿N	土坑117	5.5	1.2		10YR8/4浅黄橙		
163	土師器	皿N	土坑117	5.6	1.1		7.5YR7/4にぶい橙		
164	土師器	皿N	土坑117	5.6	1.1		7.5YR7/4にぶい橙		
165	土師器	皿N	土坑117	5.6	1.2		7.5YR7/4にぶい橙		

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土色調	産地	備　　考
166	土師器	皿N	土坑117	5.8	1.2		7.5YR8/4浅黄橙		
167	土師器	皿N	土坑117	5.8	1.3		10YR8/4浅黄橙		
168	土師器	皿N	土坑117	5.8	1.3		10YR8/4浅黄橙		
169	土師器	皿N	土坑117	6.4	1.2		10YR8/3浅黄橙		
170	土師器	皿Sb	土坑117	9.2	(1.9)		7.5YR7/4にぶい橙		
171	土師器	皿Sb	土坑117	8.9	1.8		10YR7/3にぶい黄橙		
172	土師器	皿Sb	土坑117	9.1	2.0		7.5YR6/4にぶい橙		
173	土師器	皿S	土坑117	10.2	2.2		5YR7/4にぶい橙		
174	土師器	皿S	土坑117	10.5	1.9		5YR7/6橙		
175	土師器	皿S	土坑117	10.5	2.1		10YR6/2灰黄褐		
176	土師器	塩壷蓋	土坑117	7.0	1.4		2.5Y7/4淡赤橙～6/4にぶい橙		
177	土師器	塩壷	土坑117	6.0	(8.7)		7.5YR7/4にぶい橙		
178	土師器	鉢	土坑117	6.8	5.8	7.5	7.5YR7/4にぶい橙	伏見・深草	二次被熱を受ける
179	土師器	火入れ	土坑117	10.5	4.6	7.5	10YR8/2灰白		
180	施釉陶器	鉢	土坑117	18.5	7.1	5.4	2.5Y8/1灰白	肥前系	釉:5G6/1緑灰、10YR8/1灰白
181	白磁	小杯	土坑117	5.9	2.7	2.6	N8/0灰白		
182	青磁	蓋	土坑117	5.2	(2.0)		N8/0灰白		釉:10GY8/1明緑灰
183	染付	椀	土坑117	11.4	5.6	4.4	N8/0灰白		
184	染付	皿	土坑117	13.0	3.2	5.9	N8/0灰白		捻輪状に仕上げる
185	土師器	皿N	土坑15	5.1	1.2		10YR8/3浅黄橙		
186	土師器	皿N	土坑15	5.1	1.3		7.5YR8/3浅黄橙		
187	土師器	皿N	土坑15	5.1	1.4		7.5YR7/3にぶい橙		
188	土師器	皿N	土坑15	5.3	1.4		7.5YR8/4浅黄橙		
189	土師器	皿N	土坑15	5.6	1.2		7.5YR7/4にぶい橙		
190	土師器	皿N	土坑15	6.0	1.4		7.5YR8/3浅黄橙		
191	土師器	皿S	土坑15	9.8	2.1		7.5YR7/4にぶい橙		
192	土師器	皿S	土坑15	9.9	1.7		7.5YR8/3浅黄橙～10YR5/1褐灰		
193	土師器	皿S	土坑15	9.9	1.8		10YR7/3にぶい橙		
194	土師器	皿S	土坑15	9.9	1.9		10YR8/3浅黄橙		
195	土師器	皿S	土坑15	10.0	1.8		10YR8/3浅黄橙～7.5YR5/2灰褐		
196	土師器	皿S	土坑15	10.0	1.8		10YR8/3浅黄橙～7.5YR7/4にぶい橙		
197	土師器	皿S	土坑15	10.0	2.0		10YR8/3浅黄橙		
198	土師器	皿S	土坑15	10.1	(1.9)		7.5YR7/4にぶい橙～10YR3/1黒褐		
199	土師器	皿S	土坑15	10.3	1.9		10YR8/3浅黄橙		
200	土師器	皿S	土坑15	11.8	2.5		10YR8/3浅黄橙		
201	施釉陶器	小壷	土坑15	3.1	2.8	3.7	2.5Y8/3淡黄	瀬戸・美濃系	釉:7.5YR3/4暗褐
202	施釉陶器	皿	土坑15	11.8	4.4	4.8	2.5Y8/1灰白	瀬戸・美濃系	釉:2.5Y8/2灰白
203	施釉陶器	椀	土坑15	8.7	6.5	3.8	2.5Y5/4にぶい赤褐	唐津	釉:7.5YR4/2灰褐
204	施釉陶器	椀	土坑15	10.5	6.6	4.5	2.5Y5/4にぶい赤褐	唐津	釉:7.5YR4/2灰褐
205	施釉陶器	椀	土坑15	11.2	5.6	3.9	10YR8/3浅黄橙	唐津	釉:10YR7/3にぶい黄橙
206	施釉陶器	椀	土坑15	10.2	8.7	3.7	2.5Y7/1灰	唐津	釉:5Y6/1灰
207	施釉陶器	皿	土坑15	17.2	4.7	5.4	N7/0灰白	唐津	釉:N7/0灰白
208	軟質施釉陶器	灯明皿	土坑15	11.1	(2.4)	5.6	5Y8/1灰白		釉:5Y7/2灰白
209	軟質施釉陶器	灯火具	土坑15	4.9	2.9	3.5	N7/0灰白		釉:7.5YR3/1黒褐
210	軟質施釉陶器	蓋	土坑15	3.0	(3.6)		10YR8/1灰白		釉1:10YR5/4にぶい黄褐 2:明緑　3:2.5Y7/4浅黄
211	施釉陶器	茶入れ	土坑15	2.5	(2.0)		7.5YR4/1褐灰		釉:7.5YR3/1黒褐
212	施釉陶器	茶入れ	土坑15	2.6	(1.7)		7.5YR6/1褐灰		釉:5YR2/1黒褐
213	施釉陶器	茶入れ	土坑15	2.6	(3.8)		2.5Y8/2灰白		釉:7.5YR2/2黒褐
214	施釉陶器	茶入れ	土坑15		(3.5)		2.5Y7/2灰黄		釉:7.5YR3/4暗褐
215	施釉陶器	茶入れ	土坑15	3.8	(6.9)		10YR4/3にぶい黄褐		釉:7.5YR3/4暗褐
216	施釉陶器	茶入れ	土坑15	3.0	(3.2)		2.5Y7/2灰黄		釉:5YR2/1黒褐
217	施釉陶器	茶入れ	土坑15	2.4	6.1	2.6	7.5YR4/3褐		釉:5YR2/2黒褐
218	施釉陶器	茶入れ	土坑15	2.8	(5.4)		2.5Y8/2灰白		釉:7.5YR2/3極暗褐

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土色調	産地	備　　考
219	施釉陶器	茶入れ	土坑15		(5.2)	3.0	5Y4/3にぶい赤褐		釉:5YR2/2黒褐
220	施釉陶器	茶入れ	土坑15	2.9	6.6	2.5	10YR5/1褐灰		釉:10YR3/4暗褐
221	施釉陶器	茶入れ	土坑15	2.2	5.7	2.0	10YR6/3にぶい黄橙		釉:7.5YR4/3褐
222	施釉陶器	茶入れ	土坑15		(5.7)	2.4	5YR4/2灰褐		釉:5YR3/4暗赤褐
223	施釉陶器	茶入れ	土坑15		(6.1)		10YR7/3にぶい黄橙		釉:7.5YR3/4暗褐
224	施釉陶器	茶入れ	土坑15		(4.9)	1.8	10YR5/2灰黄褐		釉:7.5YR3/4暗褐
225	施釉陶器	茶入れ	土坑15	5.4	5.8	3.2	5YR4/3にぶい赤褐		釉:7.5YR3/2黒褐
226	施釉陶器	茶入れ	土坑15	3.3	5.9	2.5	7.5YR5/3にぶい褐		釉:7.5YR2/2黒褐
227	施釉陶器	茶入れ	土坑15		(5.5)	2.9	10YR5/2灰黄褐		釉:7.5YR4/3褐
228	施釉陶器	茶入れ	土坑15	3.1	8.9	3.5	2.5YR5/6明赤褐		釉:10YR4/2灰黄褐
229	施釉陶器	茶入れ	土坑15		(7.3)	2.6	7.5YR6/4にぶい橙		釉:7.5YR3/2黒褐
230	施釉陶器	茶入れ	土坑15		(6.8)	3.7	N7/0灰白		釉:7.5YR4/2灰褐
231	施釉陶器	茶入れ	土坑15		(8.3)	4.1	10YR8/3浅黄橙		釉:5Y5/4オリーブ
232	施釉陶器	茶入れ	土坑15		(6.1)	4.2	2.5Y7/2灰黄		釉:7.5YR3/4暗褐
233	施釉陶器	茶入れ	土坑15		(6.6)	4.6	7.5YR5/1褐灰		釉:7.5YR3/4暗褐
234	焼締陶器	擂鉢	土坑15	33.6	12.7	17.6	2.5YR5/4にぶい赤褐	堺・明石系	
235	染付	椀	土坑15	6.8	(4.6)		N8/0灰白	肥前	
236	染付	椀	土坑15	10.3	5.8	4.4	N8/0灰白	肥前	
237	染付	皿	土坑15	13.4	3.3	7.4	N8/0灰白	肥前	
238	染付	蓋	土坑15	4.2	2.6		N8/0灰白	肥前	
239	輸入磁器 青花	椀	土坑15	11.4	(5.1)		N8/0灰白	景徳鎮	
240	輸入磁器 青花	椀	土坑15	10.6	7.6	5.0	N8/0灰白	景徳鎮	
241	輸入磁器 青花	椀	土坑15	14.0	6.9	5.8	N8/0灰白	景徳鎮	高台にトチン付着
242	輸入磁器 青花	蓋	土坑15	7.5	(2.9)		N8/0灰白	景徳鎮	
243	輸入陶器 華南三彩	蓋	土坑15	6.0	1.1		10YR8/3浅黄橙	中国	10YR8/1灰白～7.5YR7/3浅黄～2.5GY7/1明オリーブ灰
244	土師器	皿S	土坑18	10.3	2.1		10YR8/3浅黄橙		
245	土師器	皿S	土坑18	10.4	1.9		7.5YR8/3浅黄橙		
246	土師器	皿S	土坑18	10.4	2.0		10YR8/2灰白		
247	土師器	皿S	土坑18	10.5	1.9		7.5YR8/2灰白		
248	土師器	皿S	土坑18	10.6	1.9		10YR8/3浅黄橙		
249	土師器	皿S	土坑18	10.8	1.9		10YR8/3浅黄橙		
250	土師器	鉢	土坑18	5.9	1.8	4.8			
251	施釉陶器	小杯	土坑18	5.2	3.3	2.4	2.5Y7/1灰白	瀬戸・美濃系	釉:5Y7/2灰白
252	施釉陶器	鉢	土坑18	15.0	7.1	11.5	2.5Y8/2灰白	瀬戸・美濃系	釉:10YR2/2黒褐～8/6黄橙
253	施釉陶器	椀	土坑18	9.0	5.7	2.9	7.5Y8/1灰白	京・信楽系	釉:7.5Y7/1灰白
254	施釉陶器	椀	土坑18	10.9	6.5	4.5	5Y8/1灰白	京・信楽系	釉:5Y7/3浅黄
255	施釉陶器	椀	土坑18	10.5	6.6	4.8	2.5Y7/1灰白	京・信楽系	釉:5Y7/1灰白、緑、赤、2.5Y4/2暗灰黄
256	施釉陶器	急須	土坑18		(10.4)		10YR8/2灰白	京・信楽系	釉:2.5Y8/4淡黄、 文様:2.5Y5/6黄褐
257	施釉陶器	鍋	土坑18	17.0	8.9	7.2	2.5Y8/1灰白	京・信楽系	釉:5YR3/4暗赤褐
258	施釉陶器	鉢	土坑18	16.2	9.1	12.4	N8/0灰白	京・信楽系	釉:N7/0灰白
259	施釉陶器	皿	土坑18	29.0	8.5	11.0	7.5YR6/2灰褐	唐津	釉a:7.5YR3/1黒褐 b:5Y5/3灰オリーブ
260	染付	椀	土坑176	7.3	5.2	4.3	N8/0灰白	肥前	
261	染付	椀	土坑176	10.0	5.5	4.0	N8/0灰白	肥前	
262	染付	皿	土坑176	12.3	4.0	4.2	N8/0灰白	肥前	
263	染付	皿	土坑176	13.2	3.6	7.0	N8/0灰白	肥前	
264	施釉陶器	椀	土坑176	10.5	5.6	4.1	2.5Y8/1灰白	京・信楽系	釉:7.5Y7/1灰白
265	施釉陶器	椀	土坑176	10.7	5.7	4.1	2.5Y8/2灰白	京・信楽系	釉:7.5Y7/1灰白
266	施釉陶器	椀	土坑176	10.7	7.2	4.5	5Y8/1灰白	京・信楽系	釉:7.5Y7/2灰白
267	施釉陶器	溲瓶	土坑176	7.0	14.9	13.2	2.5Y8/2灰白	瀬戸・美濃系	釉:5Y2/1黒褐

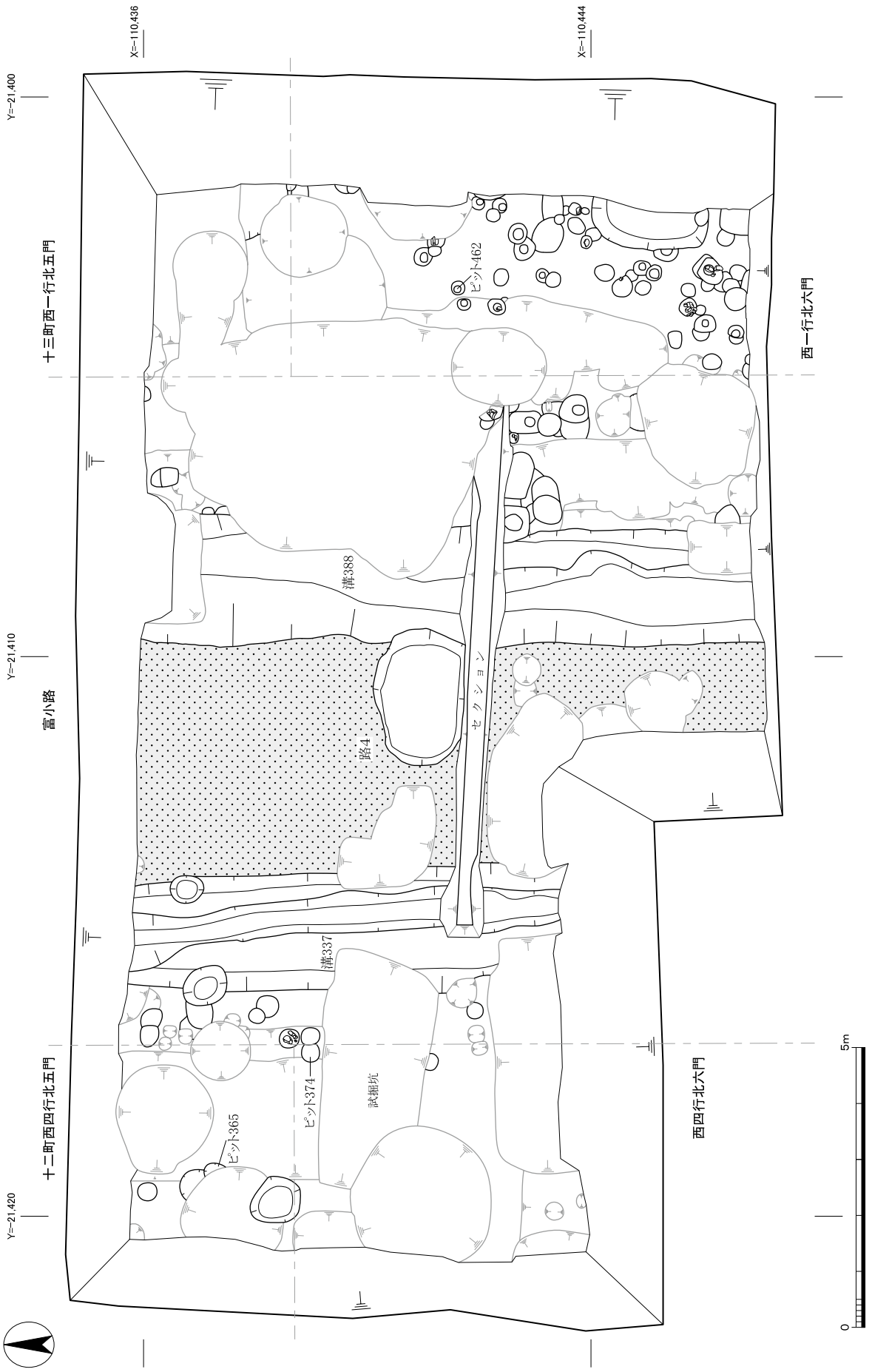
付表２　タタキ130出土鉄滓一覧表

番号	種類	長軸(mm)	短軸(mm)	厚み(mm)	重量(g)	掲載番号	分類
1	椀形滓	70	47	18	70		①
2	椀形滓	70	64	14	70		
3	椀形滓	85	47	17	70		
4	椀形滓	65	57	18	80		
5	椀形滓	87	63	9	90		
6	椀形滓	87	57	14	90		
7	椀形滓	80	59	7	90		
8	椀形滓	72	66	17	95	鍛3	
9	椀形滓	66	55	17	95		
10	椀形滓	79	60	28	105		
11	椀形滓	81	60	18	115		
12	椀形滓	64	58	13	120		
13	椀形滓	105	61	16	125		
14	椀形滓	86	62	16	125		
15	椀形滓	64	63	18	135		②
16	椀形滓	88	79	15	150		
17	椀形滓	91	72	22	150		
18	椀形滓	80	55	20	150		
19	椀形滓	84	82	30	155		
20	椀形滓	81	51	28	160		
21	椀形滓	79	63	21	160		
22	椀形滓	105	71	19	190	鍛4	
23	椀形滓	78	77	21	190		
24	椀形滓	112	75	19	210		
25	椀形滓	108	72	11	210		
26	椀形滓	101	62	25	215		
27	椀形滓	99	76	23	230		③
28	椀形滓	(70)	67	44	230		
29	椀形滓	125	95	25	265	鍛6	
30	椀形滓	99	77	22	265	鍛5	
31	椀形滓	109	72	39	270		
32	椀形滓	115	(90)	24	285		
33	椀形滓	126	92	30	310		
34	椀形滓	106	81	39	430		④
35	椀形滓	133	99	35	450		
36	椀形滓	105	83	29	455		
37	椀形滓	141	110	12	465	鍛7	
38	椀形滓	117	95	37	480		
39	椀形滓	124	69	31	480		
40	椀形滓	128	96	21	485		
41	椀形滓	109	107	31	525		
42	椀形滓	165	96	14	570	鍛8	
43	椀形滓	136	104	34	840	鍛9	⑤

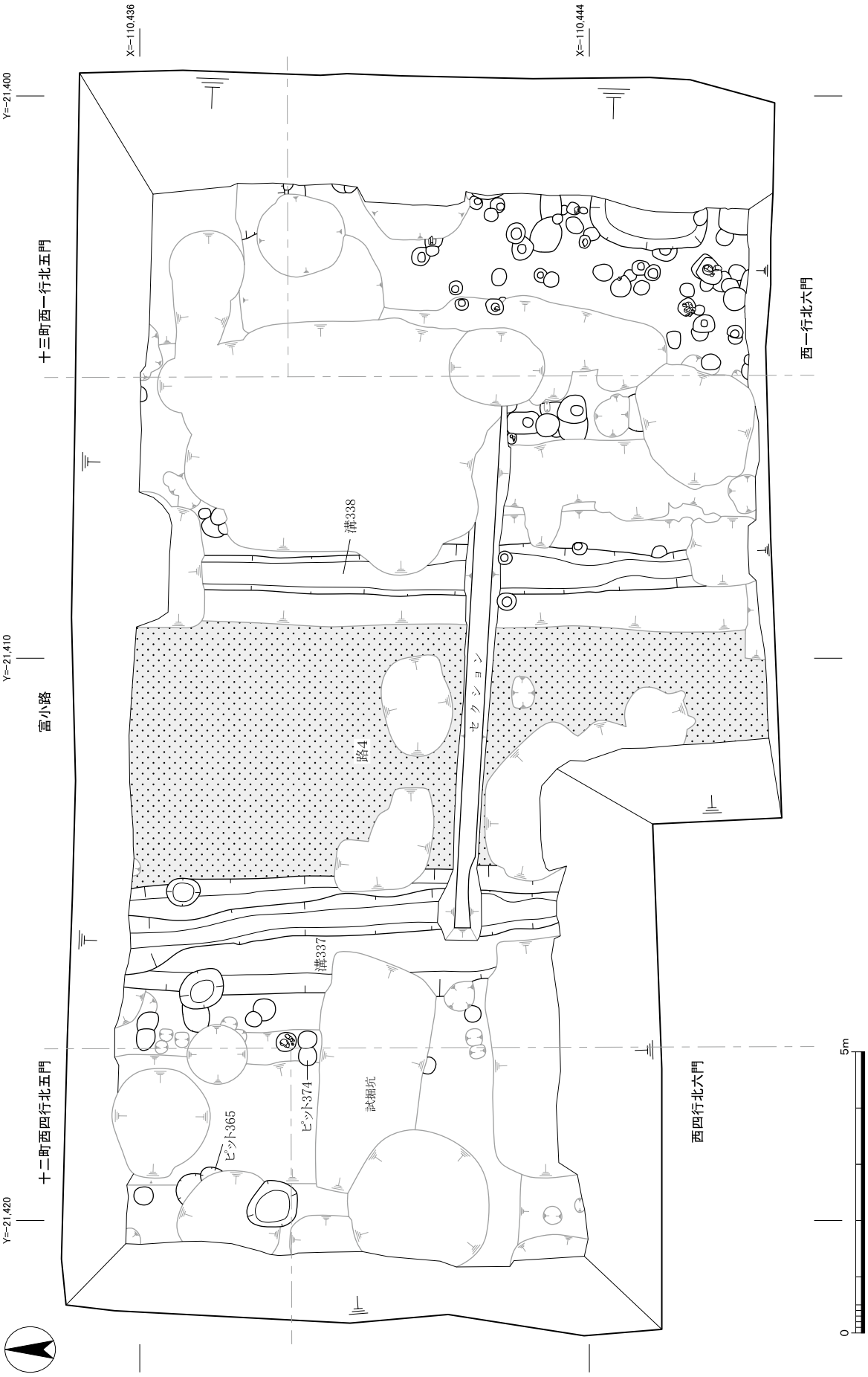
※ ①125g以下、②126～215g、③216～310g、④311～570g、⑤571g以上

番号	種類	長軸(mm)	短軸(mm)	厚み(mm)	重量(g)	掲載番号	分類
44	流出滓	27	(20)	10	5		
45	流出滓	32	16	8	5		
46	流出滓	45	34	16	15		
47	流出滓	43	25	22	15		
48	流出滓	28	25	20	15		
49	流出滓	32	27	16	15		
50	流出滓	46	25	13	15		
51	流出滓	59	28	15	25		
52	流出滓	40	38	12	25		
53	流出滓	45	31	18	30		
54	流出滓	54	35	16	30		
55	流出滓	50	44	13	30		
56	流出滓	58	46	12	30		
57	流出滓	39	33	18	30		
58	流出滓	61	(40)	13	30		
59	流出滓	51	39	18	40		
60	流出滓	55	50	18	45		
61	流出滓	49	35	26	45		
62	流出滓	60	33	9	55		
63	流出滓	69	44	21	60		
64	流出滓	69	40	14	60		
65	流出滓	60	48	23	70		
66	流出滓	67	46	19	70		
67	流出滓	68	48	22	75		
68	流出滓	66	65	19	85		
69	流出滓	56	50	24	90		
70	流出滓	92	49	25	90		
71	流出滓	80	61	26	95		
72	流出滓	76	62	32	100		
73	流出滓	81	58	23	104		
74	流出滓	85	54	27	105		
75	流出滓	70	(50)	28	105		
76	流出滓	85	55	15	120		
77	流出滓	79	56	29	155		
78	流出滓	113	91	27	240		

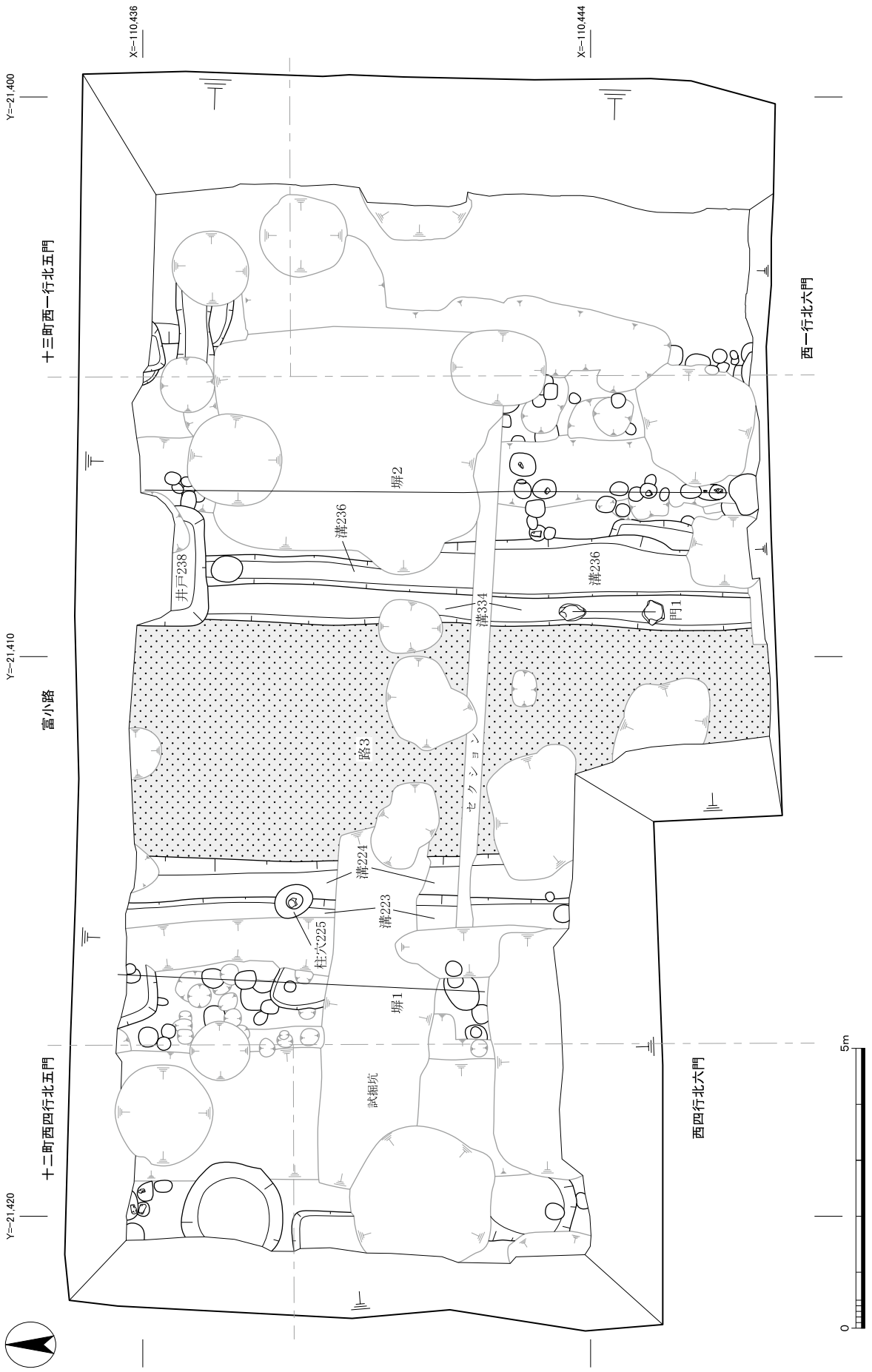
図　　版



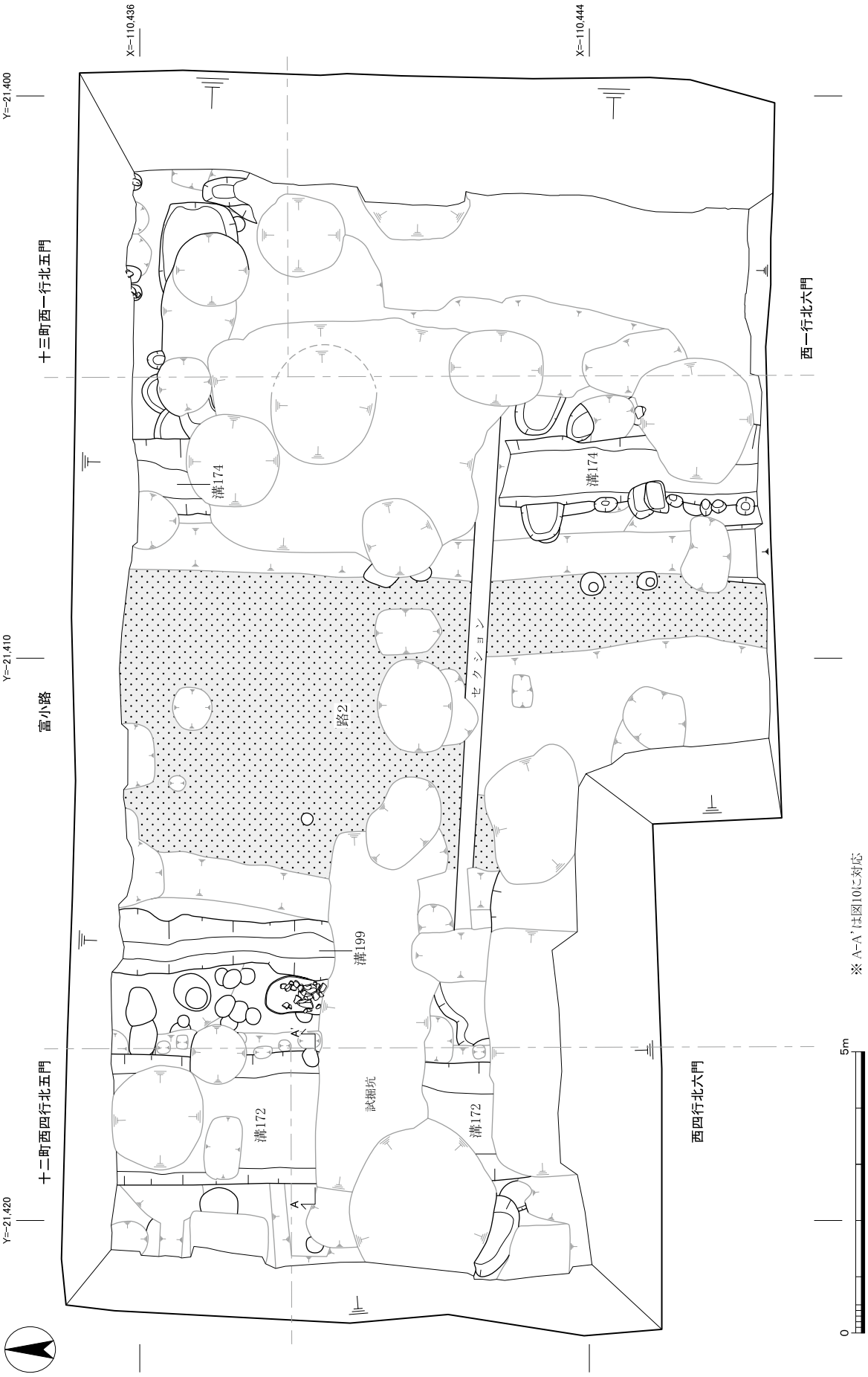
第４－２面遺構平面図（１：100）



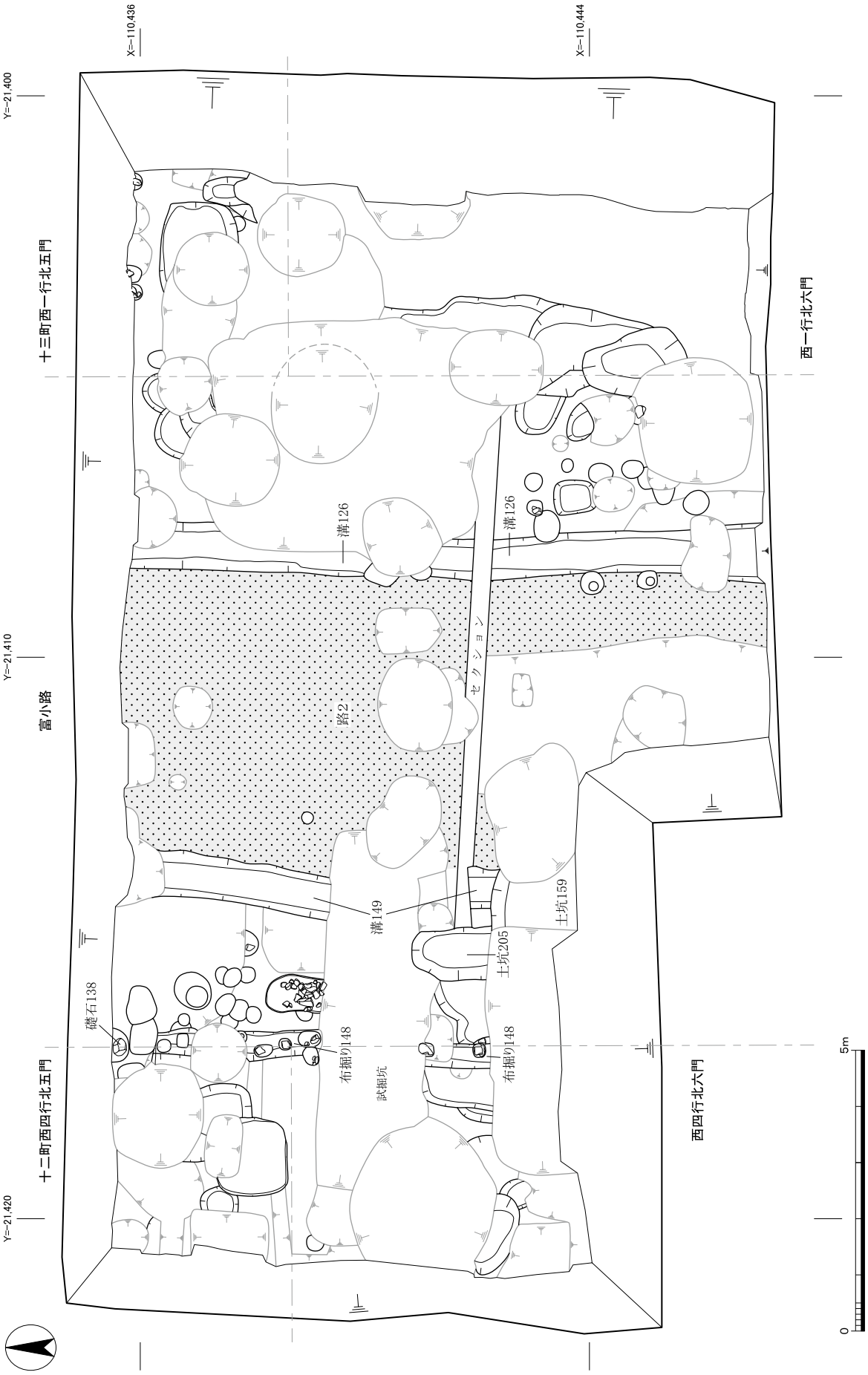
第４－１面遺構平面図（１：100）



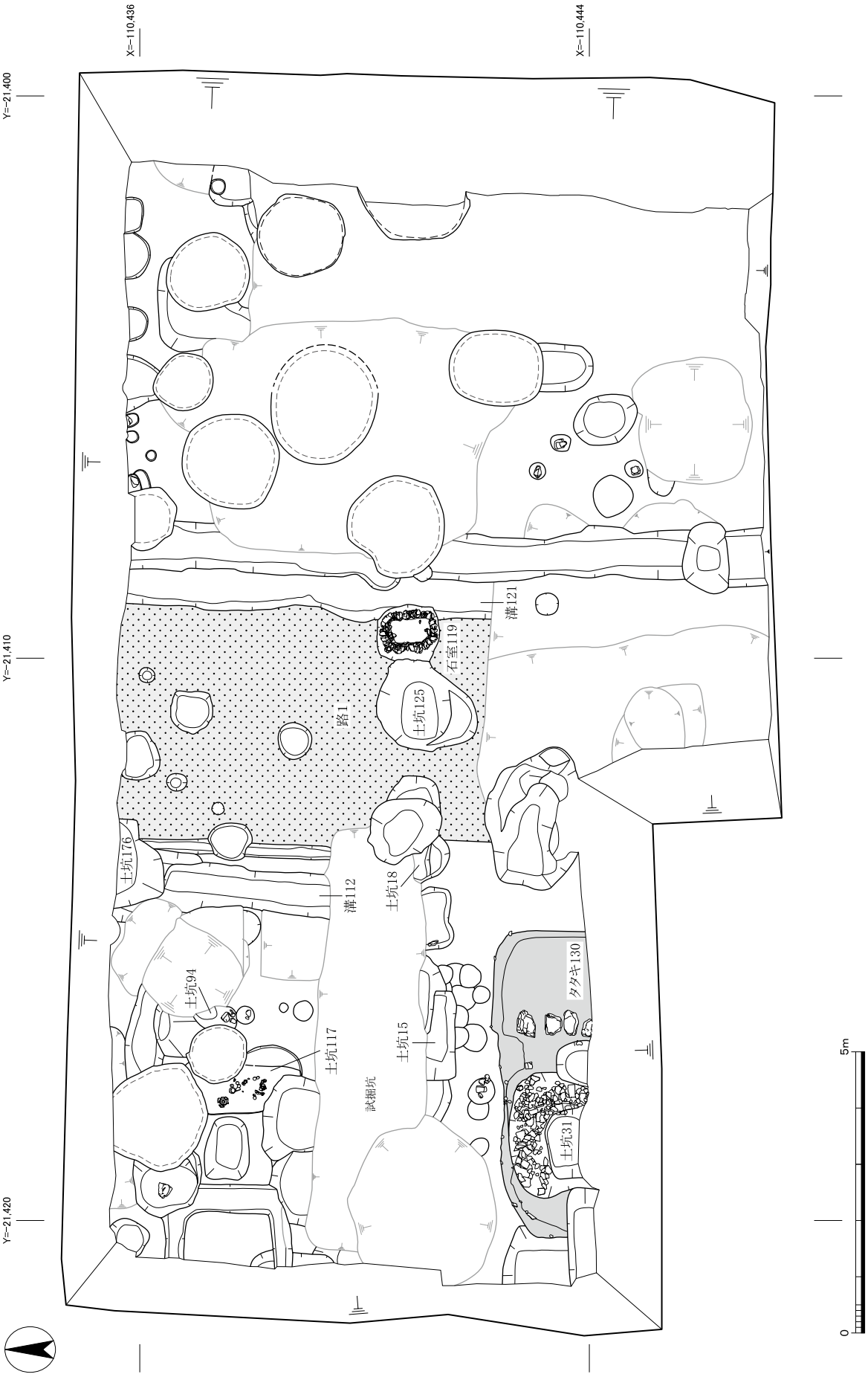
第３面遺構平面図（１：100）



第２－２面遺構平面図（１：100）

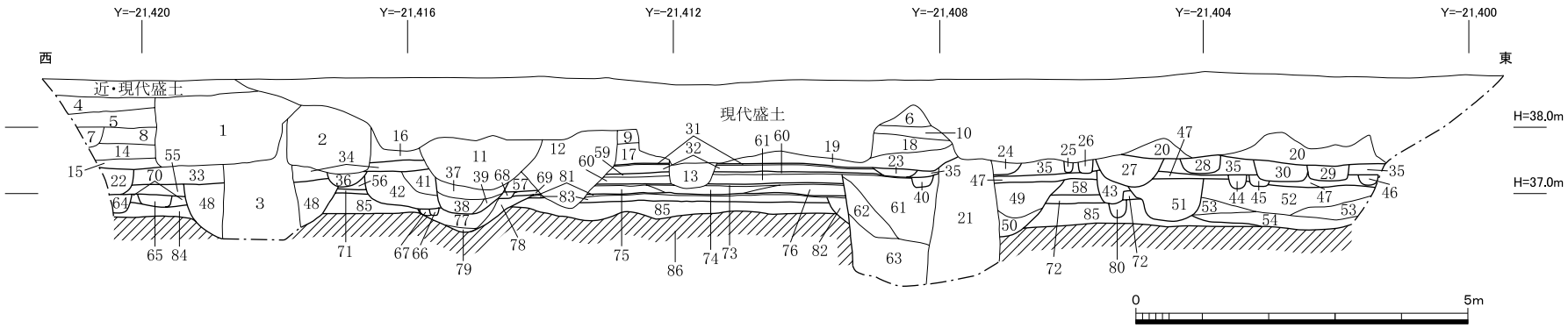


第２－１面遺構平面図（１：100）

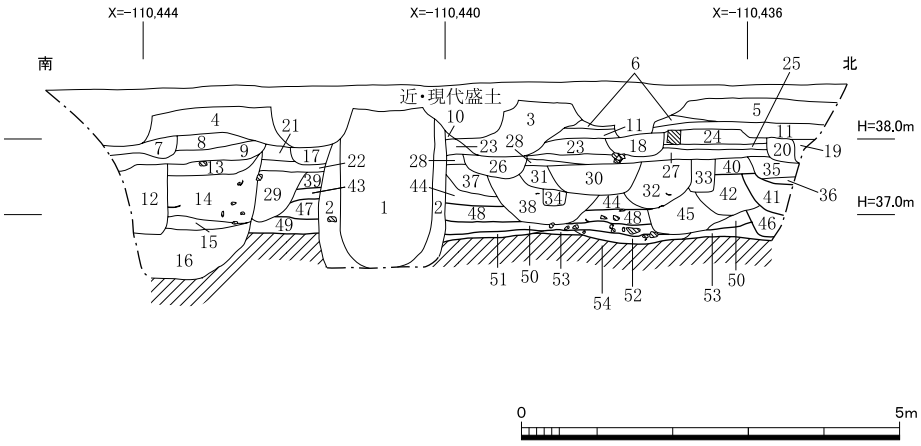


第1面遺構平面図（1：100）

北壁断面図（1：100）



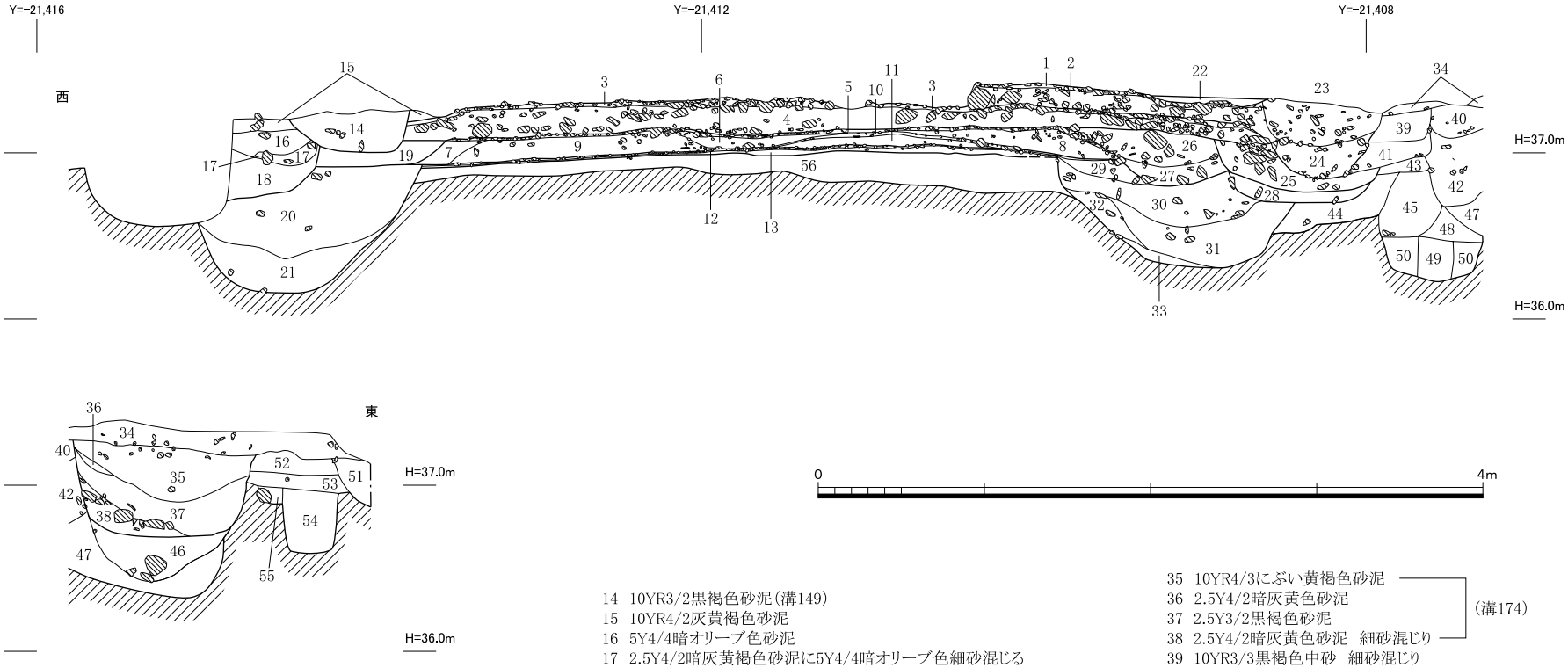
1 7.5YR4/4 褐色粗砂　焼土・焼け瓦極多量に混
2 7.5YR4/4 褐色粗砂　焼土・焼け瓦極多量に混
3 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（井戸2）
4 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂に
10YR5/4 にぶい黄褐色細砂が層状
5 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂
6 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
（江戸時代整地層）
7 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂
8 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂
9 10YR4/4 褐色中砂～細砂
10 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥に
2.5Y5/4 黄褐色砂泥シルト混じる
（江戸時代整地層）
11 2.5Y3/2 黒褐色粗砂（土坑）
12 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂礫（土坑176）
13 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（土坑84）
14 2.5Y3/2 黒褐色泥砂
15 2.5Y3/1 黒褐色泥砂
16 2.5Y3/2 黒褐色泥砂
17 10YR3/2 黒褐色砂泥
18 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
19 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
20 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
（江戸時代整地層）
21 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂（井戸6）
22 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂（土坑32）
23 2.5Y3/2 黒褐色砂泥細砂（溝121）
24 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（柱穴95）
25 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（柱穴98）
26 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（柱穴99）
27 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂（土坑101）
28 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（土坑105）
29 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（土坑107）
30 2.5Y3/1 黒褐色砂泥（土坑106）
31 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
φ15cmまでの礫を極多量混（路1路面）
32 2.5Y3/2 黒褐色泥砂　φ15cmまでの礫を多量混（路1路盤）
33 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
34 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
35 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
（室町時代整地層）
36 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（礎石138）
37 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
38 2.5Y4/1 黄灰色シルト粘質
39 10YR4/2 灰黄褐色シルト
（溝199）
40 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（溝126）
41 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
42 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
（土坑260）
43 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
44 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（柱穴212）
45 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（柱穴206）
46 10YR3/2黒褐色砂泥（柱穴215）
47 2.5Y4/1 黄灰色砂泥（鎌倉時代整地層）
48 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（溝172）
49 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（溝174）
50 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（溝174）
51 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（土坑325）
52 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
53 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
54 2.5Y5/3 黄褐色シルト
（土坑327）
55 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
56 10YR5/3 にぶい黄橙色砂泥
57 10YR4/4 褐色砂泥
58 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトに
5Y5/3 灰オリーブ色シルト混
（平安時代後期整地層）
59 10YR4/2 灰黄褐色砂泥　φ15cmまでの礫を極多量混（路2路面）
60 2.5Y4/1 黄灰色砂泥　φ15cmまでの礫を多量混（路2路盤）
61 2.5Y3/2 黒褐色砂泥砂礫
62 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
63 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂
（井戸238）
64 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（柱穴298）
65 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（柱穴299）
66 10YR3/2 黒褐色砂泥（柱穴291）
67 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（柱穴290）
68 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（溝223）
69 10YR4/2 灰黄褐色泥砂（溝224）
70 10YR5/6 黄褐色シルト
71 10YR5/6 黄褐色シルト
72 2.5Y5/3 黄褐色シルト
（平安時代中期整地層）
73 5Y5/4 オリーブ色シルト 硬質
φ4cmまでの礫を極多量混（路3路面）
74 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
φ8cmまでの礫を少量混
75 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂
φ4cmまでの礫を少量混
76 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂
φ4cmまでの礫を少量混
（路3路盤）
77 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
78 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
79 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂
（溝337）
80 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（柱穴359）
81 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
φ7cmまでの礫を極多量混（路4路面）
82 2.5Y4/2暗灰黄色シルト（溝388）
83 10YR4/4 褐色細砂～シルト（路4路盤）
84 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（平安時代中期整地層）
85 10YR4/4 褐色シルト（飛鳥時代遺物包含層）
86 10YR5/2 灰黄褐色砂礫　φ4cmまでの礫を極多量混（地山）



1 7.5YR4/6 褐色砂泥 焼土・焼け瓦極多量に混
2 10YR3/2 黒褐色砂泥
3 7.5YR4/6 褐色砂泥 焼土・焼け瓦極多量に混
4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂～細砂
5 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂に 10YR5/4 灰黄褐色細砂が層状
6 10YR3/3 暗褐色粗砂
（江戸時代整地層）
7 10YR3/2 黒褐色砂泥
8 10YR2/2 黒褐色砂泥
9 2.5Y3/2 黒褐色泥砂
10 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
11 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
（江戸時代整地層）
12 2.5Y3/2 黒褐色砂泥に 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトブロック混（土坑26）
13 2.5Y5/3 黄褐色細砂に 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥混
14 2.5Y2/1 黒色砂泥に 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥混
15 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂
16 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
（土坑27）
17 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
18 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂泥
19 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂
20 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
21 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
22 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
23 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
24 2.5Y3/2 黒褐色細砂
25 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂
（江戸時代整地層）
26 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
27 10YR3/2 黒褐色砂泥
28 2.5Y3/2 黒褐色細砂ト
（江戸時代整地層）
29 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（土坑157）
30 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
31 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
32 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
33 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（溝34）
34 10YR4/1 褐灰色砂泥（溝34）
35 2.5Y3/2 黒褐色泥砂
36 2.5Y3/1 黒褐色泥砂
（江戸時代整地層）
37 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
38 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（土坑35）
39 10YR3/2 黒褐色砂泥
40 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂
（江戸時代整地層）
41 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（土坑32）
42 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
43 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
44 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥
（室町時代整地層）
45 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 粗砂多量に混
46 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（ピット298）
47 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
48 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
（平安時代後期から鎌倉時代整地層）
49 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
50 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
（平安時代中期整地層）
51 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 粗砂・礫混
52 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
53 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
（平安時代中期整地層）
54 10YR5/2 灰黄褐色砂礫 φ4cmまでの礫を極多量混（地山）

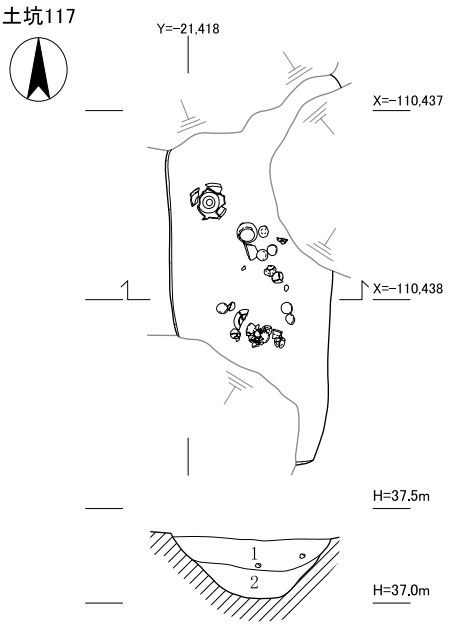
西壁断面図（1：100）

路1～4断面図〔セクション部分〕（1：40）



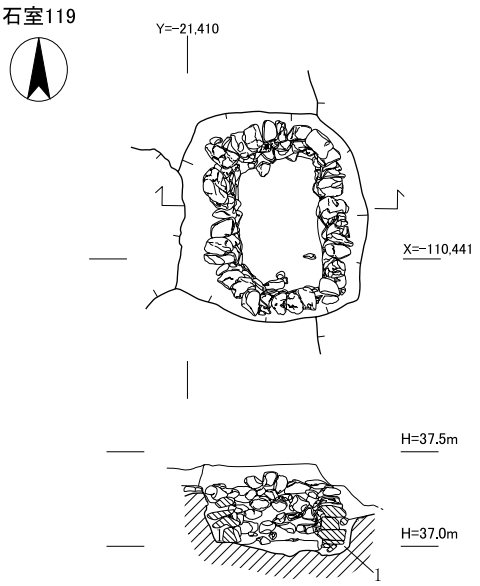
1　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　φ～9cmの礫敷く　固く締まる（路1路面）
2　2.5Y3/2黒褐色砂泥（路1路盤）
3　10YR4/2灰黄褐色砂泥　φ～7cmの礫敷く　固く締まる（路2路面）
4　2.5Y4/1黄灰色砂泥（路2路盤）
5　5Y5/4オリーブ色シルトφ～9cmの礫敷く　固く締まる（路3路面）
6　10YR3/4暗褐色シルト　固く締まる
7　10YR4/4オリーブ褐色シルト
8　10YR4/4オリーブ褐色シルト
9　2.5Y4/3オリーブ褐色細砂
10　10YR3/1黒褐色砂泥
11　2.5Y4/3オリーブ褐色細砂　粗砂混じり
（路3路盤）
12　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥（路4路面）
13　10YR4/4褐色シルト　細砂まじり（路4路盤）
14　10YR3/2黒褐色砂泥（溝149）
15　10YR4/2灰黄褐色砂泥
16　5Y4/4暗オリーブ色砂泥
17　2.5Y4/2暗灰黄褐色砂泥に5Y4/4暗オリーブ色細砂混じる
18　2.5Y3/2黒褐色砂泥に5Y4/4暗オリーブ色細砂混じる（溝223）
19　2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥（溝224）
20　5Y3/2オリーブ黒色砂泥に5Y4/3暗オリーブ色シルト混じる（溝337）
21　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥（溝337）
22　10YR3/2黒褐色砂泥（溝121）
23　10YR3/2黒褐色砂泥
24　2.5Y3/2黒褐色砂泥　細砂混じり（溝126）
25　10YR3/2黒褐色砂泥（溝236）
26　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（溝334）
27　10YR3/3暗褐色シルトに2.5Y4/1黄灰色砂泥混（溝334）
28　2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥（溝338）
29　2.5Y4/2暗灰黄色泥砂
30　5Y4/3暗オリーブ色シルト
31　2.5Y3/1黒褐色シルト
32　2.5Y4/3オリーブ褐色シルト　細砂混じり
33　10YR4/3にぶい黄褐色粗砂
（溝388）
34　2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
35　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
36　2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
37　2.5Y3/2黒褐色砂泥
38　2.5Y4/2暗灰黄色砂泥　細砂混じり
（溝174）
39　10YR3/3黒褐色中砂　細砂混じり
40　2.5Y3/1黒色砂泥
41　10YR4/3にぶい黄褐色粗砂　細砂混じり
42　2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
43　2.5Y4/2暗灰黄色シルト
44　2.5Y3/2黒褐色シルト
45　2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
46　2.5Y4/2暗灰黄色細砂
47　2.5Y4/3オリーブ褐色細砂
48　2.5Y3/2黒褐色砂泥
49　2.5Y4/2暗灰黄色シルト　粘質
50　2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
51　2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
52　2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
53　2.5Y4/2暗灰黄色シルト
54　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
55　2.5Y3/2黒褐色砂泥
56　10YR4/4褐色細砂　シルト混じり

土坑117



1　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭多量混
2　10YR4/4褐色砂泥

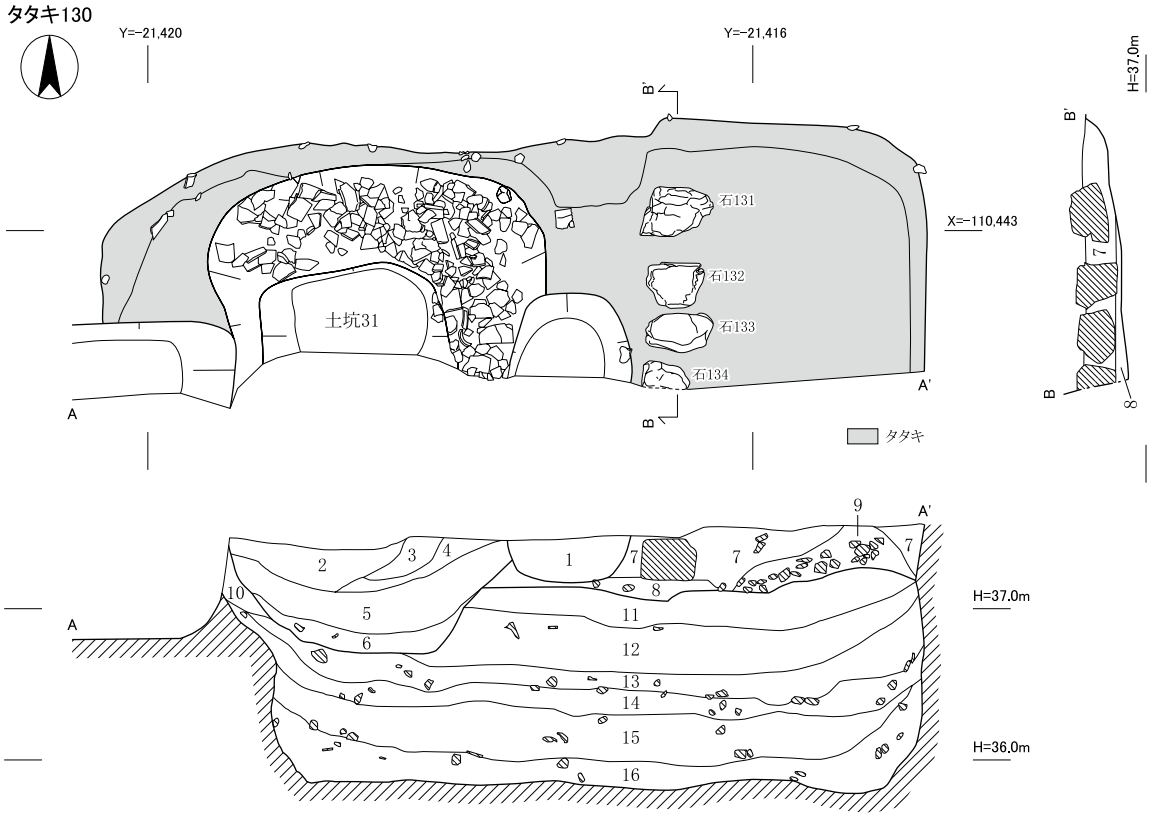
石室119



1　10YR4/2灰黄褐色砂泥　中～細砂多量混

0　2m

タタキ130



1　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　中粒砂多量混（土坑）
2　10YR4/2灰黄褐色砂泥
3　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
4　2.5Y5/4黄褐色シルト　固く締まる
5　10YR3/3暗褐色砂泥
6　10YR4/1黄灰色砂泥
（土坑31）
7　2.5Y5/4黄褐色シルト　固く締まる
8　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥　細砂多量混
9　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　φ～10cmの礫を多量混
10　10YR4/4褐色砂泥
11　10YR2/3黒褐色砂泥
12　10YR1.7/1黒色　灰
13　2.5Y3/2黒褐色砂泥に2.5Y4/6オリーブ褐色シルトブロック混
14　2.5Y4/1黄灰色砂泥　φ～10cmの礫を多量混
15　2.5Y4/1黄灰色砂泥と2.5Y5/4黄褐色細砂の互層
16　10YR3/3暗褐色シルトに2.5Y4/1黄灰色砂泥混
（下層土坑）

0　3m

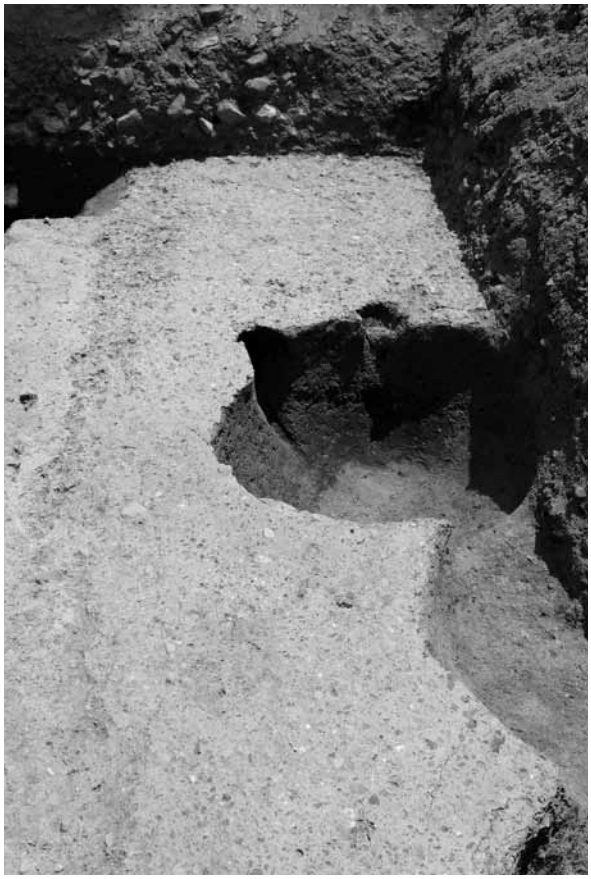
土坑117、石室119、タタキ130実測図（1：40、1：50）

1　1区 第4－1面全景（西から）

2　1区 路4（北から）

1　1区 第4－2面 路4、溝388（北東から）

2　1区 富小路：路1～4断面（南東から）

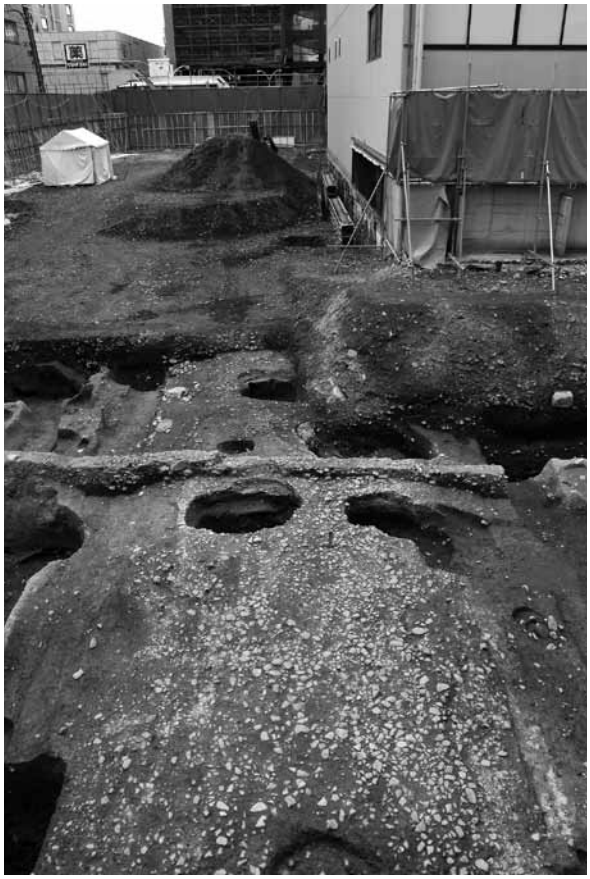


1　1区 路4路面（北から）

2　1区 溝337（北から）

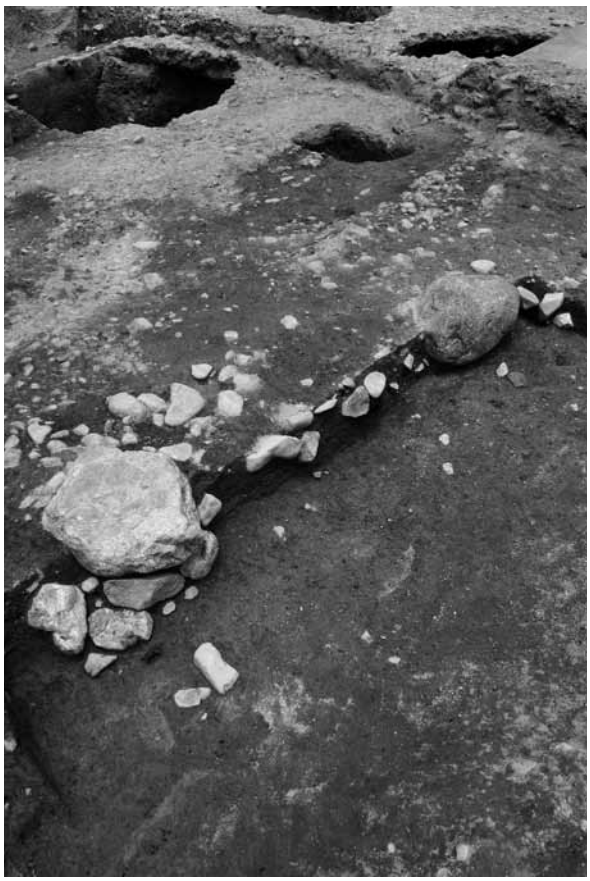
3　1区 第3面全景（西から）

図版14　遺構



1　1区 路3（北から）

2　1区 溝236、門1、路3（北から）



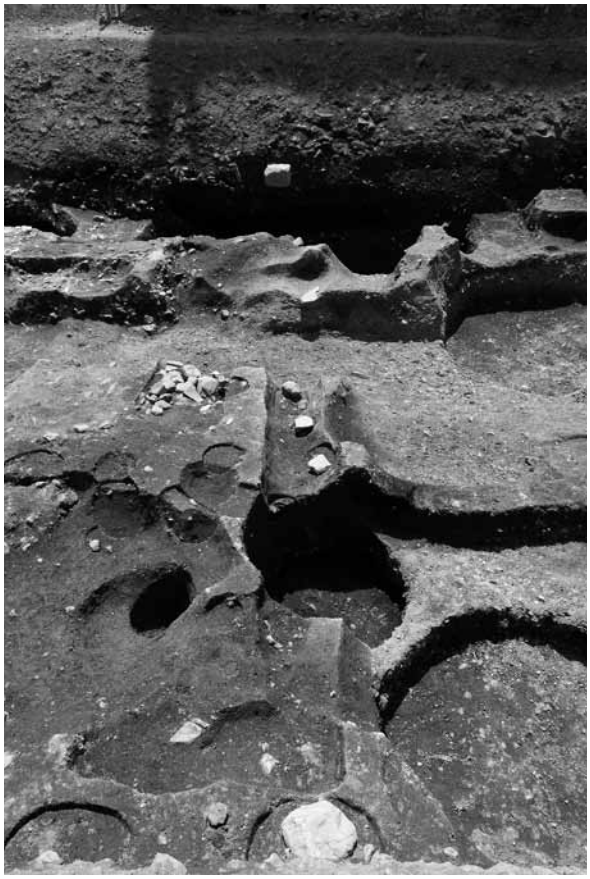
3　1区 門1断面（南東から）

4　1区 柱穴225（北から）

1　1区 第２－２面全景（西から）

2　1区 第２－１面全景（西から）

1　1区 路2（北西から）

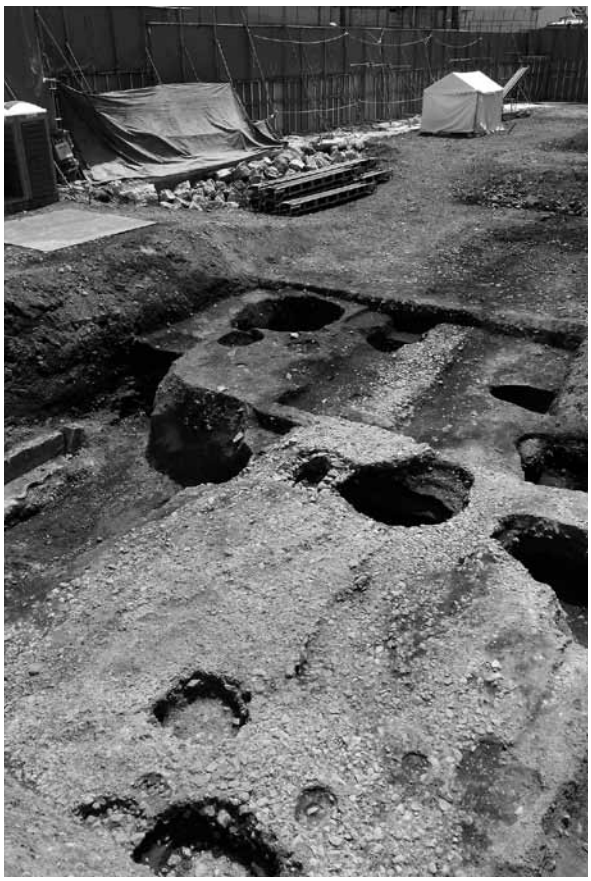


2　1区 布掘り148、礎石138（北から）

3　1区 礎石138（南から）

4　1区 路2掘下げ 水晶出土状況（北西から）

1　1区 第1面全景（西から）



2　1区 路1（北西から）

3　1区 石室119（北から）

1　1区 タタキ130（北西から）

2　1区 石131～134（北から）

3　1区 土坑117遺物出土状況（北から）

4　2区 全景（北から）

6

56

43

8

48

13

61

25

63

36

64

37

67

土器類 1

71

95

72

96

77

98

78

100

86

87

84

88

89

土器類２

土器類３

161

170

178

179

182

184

180

192

195

201

210

209

242

241

土器類４

227

220

226

215

225

245

249

253

254

255

252

土器類５

鍛冶関連遺物、金属製品、ガラス製品

報　告　書　抄　録

ふ り が な	へいあんきょうさきょうしじょうしぼうじゅうに・じゅうさんちょうあと、とみのこうじあと
書　　名	平安京左京四条四坊十二・十三町跡、富小路跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２０－３
編 著 者 名	鈴木康高
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2020年12月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京跡（へいあんきょうあと）	京都市下京区（きょうとししもぎょうく） 四条通麩屋町（しじょうどおりふやちょう） 西入立売東町（にしいるたちうりひがしまち） 28番２　他	26100	1	35度 00分 15秒	135度 45分 55秒	2020年３月23日～2020年６月18日	258㎡	オフィスビル建替え

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡	都城跡	飛鳥時代	遺物包含層	土師器、須恵器	平安時代中期から室町時代までの富小路の変遷が明らかになった。 平安時代中期の富小路に開く門跡を検出した。 江戸時代の土地利用の様相を把握した。
		平安時代中期中葉	路、溝	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、金属製品、銭貨、骨	
		平安時代中期後葉	路、溝、塀、門、柱穴	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、金属製品、骨	
		平安時代後期～鎌倉時代	路、溝、布掘り、井戸	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、金属製品、石製品、骨	
		室町時代	路、溝、土坑	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、金属製品、銭貨、石製品、骨・貝	
		江戸時代	石室、タタキ、土坑	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、国産磁器、輸入陶磁器、瓦、土製品、鍛冶関連遺物、金属製品、銭貨、石製品、骨・骨	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-3

平安京左京四条四坊十二・十三町跡、富小路跡

発行日　2020年12月28日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961